
一人のサムライ@関西

尺取虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人のサムライ@関西

【Nコード】

N7173Y

【作者名】

尺取虫

【あらすじ】

農民達は、過去の前例に倣い侍を雇おうとする。しかし、村には米はなく、粟と稗だけで、当然、そんな状態では侍は雇えない。しかし、ただ一人、呼びかけに応じた侍がいた。だが、その侍が次に雇うことを決めたのは、「お坊さん」だった。一人の侍とけつたいな仲間達が奇策を持って、時流を創る！なんでやねん。関西風、時代劇っぽい、戦記ものです。

（自サイトにある小説「一人の侍」を関西弁訳しました。）

（「7人の侍」のパロディに近いところもありますが、内容は全く違うのです。）

第1章 稲穂村からのお便り（前書き）

この小説にでてくる、所在地、言語、人物は全て架空のもので、モデルにした物、人もいません。

第1章 稲穂村からのお便り

それは、一人のサムライが生きた人生の軌跡。

侍が闊歩しているほど昔のことだった。

古河茅の国 稲穂村は、野伏による略奪に悩まされていた。

そこで悲壮な顔をした村民達が集まって、対処を話し合っていたのだった。

村の長老「大おじじ」と「金一じい」を中心に車座に座っておった。

この村を率いているのは、「蛇田 壮平」通称「そうべい」、
「岡澤 直良」通称「なおよし」、築地 幾宏 通称「つつき」
である。

そうべい：「凶作なのに、ご領主様への年貢でとれるだけとられちゃった。」

それなのに、今度はまた野伏や。もう、首くくるしかねえ。」

なおよし：「どうせ死ぬなら、なんで野伏をやってしまわねえんや。さあ、戦だ！」

とつとと戦うべー！」

：

つつきー：「それは無理な話や。勝てるわけへんではおまへん

か。
」

なおよし：「なんだと！お前から先にやってやろうか！つつきー！
お前の家族全員、野伏に連れ去られたやないか。
それでも、そないなことを言うのか！」

「よし！おらは戦うぞ」「やめろ！勝てるわけがない」

村民皆、ざわつく。

大おじじ：「ちーとばかりして！静まれ。静まれ。わしがまだ小さい頃の話やった。

ある村で、侍を7人雇って野伏を退治したちう話を聞いたことがある。

そう、侍を雇うのや！」

そうべい：「（・・ノ）ノ！さ、さむらいを雇う。大おじじ、でもどうやって。」

金一じい：「その村では、米を腹いっぱい食わせてやると釣ったそうや。

前例から考えて、我が村でも7人くらい雇えばなんとやろかるかの？」

つつきー：「それは、米があればの話やろうて。

野伏と年貢で我が村には米はほとんど無い。」

なおよし：「やってみなきゃわからんやろ！わてはやるぞ！侍雇って戦やるぞ！」

大おじじ：「そうやな。手をこまねいては状況は悪化するだけや。」

米はだせんが、稗くらいならある。

そうべい：「なおよし、つつきー、町へ行つて侍を雇つて来い！！」

大きな町の中、途方にくれる三人組。人の多さに飲まれてしまっている。

なおよし：「さあ、声かけまкруうぜ。なにグズグズしとるんだ！」

つつきー：「そないなことしたら、「無礼者！」と切り捨てられて終わりや。」

そうべい：「そういうわけや。簡単にはいかん。

それに人物も確かめへんと、後で困ることになる。」

なおよし：「ちえ。そないなことわかつてるぜ。で、侍のあてかありまへんのか？」

そうべい：「残念ながら、まるつきしないのや。

これから、知り合いの住職に話を聞いて、ほんで賭場と宿屋に行く。」

つつきー：「そないなことで、働いてくれる奇特な奴が見つかるのかいな。」

こないな損な話。」

つつきーの言葉のせいで、一同落ち込みながら移動を開始した。

お寺の住職に会いに行く途中、そう、その人物に遭遇してしまうことになったのだ。

ならず者：「おい、お前。金だせよ。」

ないなら、その刀でも置いていけ！でなきゃぶつ殺すぞ！」

堅そうな侍：「はい。要求はわかりたんや。」

あなた様のなされとる行為は、強盗でっしゃるか？」

ならず者：「抜けたこといってると、ただやすまないぞ！早く金を出せ。」

堅そうな侍：「あんはん様の行為により、

ていらしゃった上で

ウチが反撃する危険性は当然考慮し
なされとるんやね。確認させてもら

いますけれど、

ちゃんと、命賭けていらっしゃるの
やね？」

ならず者：「こいつは、気が狂つとるのか？」

わては金をだせっていつとるんじゃけ！

何でもええから早く！！」

堅そうな侍：「わかりましたんや。あんはん様がそのつもりなら、

それに見合つた対処をせなりまへん。

ウチも命を惜しみまへん。それが、道理やるからな。

」

カシヤリ、刀を抜く。

ならず者は刀を奪おうとするが、一步遅く届かない。

ならず者：「しもた。やばい奴に声かけてしもつた。逃げるぞ！」

ならず者は、脱兎のように逃げていった。

そう、それがそうべい、なおよし、つつきーが森島様を最初にみた事件やった。

なおよし：「あいつ、強いのやるか？ならずものが逃げていったぞ。

声かけようぜ。」

つつきー：「大丈夫か？髭はやして、なんかやばそうな風貌やけど。

急に斬られたりせんのか？」

そうべい：「いや、頑固そうで、堅そうな顔してるやないか。

ああいう手合いは、理屈で攻めれば説得できるよ。ま

かしとけ。」

そうべい：「あの、お侍様」。

今、稲穂村の稗を宣伝しておりまして、
稗の餅を配つとりますんや。」

堅そうな侍：「そうか、そうか。それはありがたい。腹が減つとつたのや。」

むしゃむしゃ。

そうべい：「お侍様。お代は？」

堅そうな侍：「貴様。金をとるのか。聞いてないぞ。…それでなんぼやるか。」

そうべい：「我が村を野伏から守って欲しいのや。もちろん、

食事はウチで持ちまんねんし、稗と粟を
腹いっぱいだしまんねん。」

堅そうな侍：「わしゃ。食べとらん。」

そうべい：（；、）ノ「お召し上がりになられたやないか！」

堅そうな侍：「食べてへんもん。」

なおよし：「そないな詐欺みたいな方法で、怒らせたらどうするんや。この馬鹿！」

そうべいは引つ込んでろ！」

なおよし：「お侍様。強い敵を倒し、一つの村を助けてくれまへん

かね。

わしらの身なりの通り、なにもかも野伏にとられたんや。

どうか、一緒に戦つとっただけまへんか？

皆、明日が見えなくて毎日毎晩忝年中泣いとるんや。」

堅そうな侍：「強い敵、嫌や。」

なおよし：「そこをなんとか。人助けだと思つて協力しとっただけまへんか？」

堅そうな侍：「社会の構造的欠陥と村周辺の警備体制の不備が根底にある。」

野伏退治しても、野伏はいなくならへん。やから、なにもならへん。」

つつきー：「やめようわ。」

こないな人を雇つても役に立たないやろうわ。逆に迷惑になる。」

森島様：「なんだと。」

つつきー：「だつてそうやないか。この腰抜け侍め。お前なんかに何がわかる。」

耐えてる人間の何がわかる。

貴様みたいな腰抜けがきてても、野伏に殺されるだけや。」

堅そうな侍：（Ｔ　Ｔ）

堅そうな侍：「＼。＼。＼。／ 引き受けた。その仕事引き受けた！

この森島倫正にだけへんことなどなあんもない！」

そうべい、なおよし、つつき：「えゝ。ほんまに困るわ。お侍様
「＼＼（＞＜、）＼

そうべい：「それで、森島様。どうしまっか。

これからお寺の住職に会いに行こうと思うのやけど。」

森島様：「それでよかるう。」

道を歩いとると尺八を吹いとる虚無僧がいた。

森島様：「お寺に行かへんでも僧侶なら、あそこにいるではおまへんか。」

そうべい：「虚無僧か。虚無僧は、僧侶になる前はは武士と聞きまねん。

なんか、つてがあるかもしれまへん。」

森島様：「それや、わてが話しつけてくる。」

森島様：「稲穂村で、稗と粟をどれだけでもお布施したいとの申し出があるのやが、

貴殿さえよろしければ、受け取りに来てはくれへんか。

できれば、数ヶ

月村に滞在しとっただきたい。」

虚無僧：「そうか。それはありがたい。」

森島様：「信者からのお布施やから、断ったりせんよね。絶対だよ。
〇（＼＼＼）〇」

森島様：「おい。みんな。虚無僧雇ったけれど、ええよね。」

そうべい、なおよし、つつき：「…。」

虚無僧：「わしは、道覚と申す。」

こうして、道覚様が仲間に加わった。

なおよし：「お侍様。お寺の住職を勧誘したりしたら駄目や。
ウチらは、侍を雇いたいんや。無駄に雇えん。」

森島様：ビクッ

つつき：「とはいっても、長老の話だと、あと5人は雇わなきゃ
な。侍を。」

そうべい：「前例主義者の長老のことや。
道覚様雇ったことだけでもうるさいぞ。」

一同：ため息

そうべい：「着いたぞ。この寺や。」

森島様：「極楽大空寺か。百姓の間では絶大な人気らしいな、
（。、。）ノ」

つつき：「…何ぞ悪い予感がする。まあええ。中に入ろうわ。」

道覚様：「ウチも入ってよろしいのやるか？」

お寺の中、森島、農民3人、道覚様、住職が座っている。

住職：「事情はわかった。野伏に困つとると。それで、どうすればええ。」

そうべい：「まず、ご領主様にごこのことをお伝え願いたい。」

ほんで、侍を紹介していただきたい。」

住職：「ワイが思うには、ご領主様はなあんもなさりまへんやろうわ。」

稲穂村は、国境に近く、下手に対処すればお隣の積藁の国を刺激してしまうわ。侍なら紹介できるが。…」

そうべい：「そうやるな。じゃ、その侍に会ってみまんねん。」

それだけでも、十分ありがたい。」

住職は手紙と地図を描いてそうべいに渡す。

そうべい：「この近所やね。すぐに行ってみまんねん。」

「ほんで、森島様と道覚様はここで待ってておくんなはれ。」

森島様：「なんでやねんや。仲間はずれや。酷いではおまへんか。わしがいくと、上手くいかへんと思つとるのやろ。」

つつきー：「いや、お侍様のお手を煩わせるわけにはいきまへんので。」

森島様：「そうかのう？」

そうべい：「なおよし、つつきー、が出かけ、寺には住職、森島様、道覚様だけが座っている。」

住職：「その虚無僧は…？」

森島様：「ウチが雇うことに決めたんや。」

住職：「思惑でもあるのか？それとも虚無僧から侍に還俗すると？」

森島様：「いや、僧侶であることに意義があるのや。」

僧侶が村にいれば、野伏達も村に攻撃しにくくなるでっしゃろ。

名のある高僧ちうことにしておけば、効果があるのではと。」

住職：「そつやな。でも虚無僧殿だけでは、ちびつと抑止力としては弱いのうわ。」

どや、うちの弟子を一人送ろうか。

我が寺の僧侶を傷つけるようなことは、野伏もせんやろうわ。

信者が多いこの土地で、そないなことをしては生きていけんからな。」

森島様　：「それはありがたい。」

では、念仏が上手い僧侶を一人雇わせていただきたい。」

「

住職：「うむ。それなら、恵向がいる。」

念仏の歌唱力だけは若手で一番や。住職命令で派遣しようわ。」

こうして、恵向が、一行に加わった。

そのころ、住職に紹介してもらった場所で、そつべい、なおよし、つつき―は紹介された侍を探していた。

そつべい：「確かにここのはずなんやけど。侍が住んでいるようなところがないな。」

つつき―：「どう見ても農家ではおまへんか。居候しとるちつこと

か？」

なおよし：「とりあえずこの家の人に、尋ねてみようわ。」

ガラガラ。

そうべい：「すいまへん。ここに峯澤政之助様ちう、

お侍様がいらっしやると聞いたんやが、」

老婆：「峯澤様なら、裏の畑や」

そうべい：「それはありがたい。すぐに行ってみまんねん。」

「よかった。どうやらここにいらっしやるようや。」

3人組。裏庭へ移動。

峯澤様：ジャキーン。ジャキーン。

つつきー：「あれはなんや。畑を耕しとるのか？」

なおよし：「馬鹿なことをいうでは無い。

あれは下段からのすねへの打ち込みを稽古してええるのや。」

「練習中に申し訳ない。極楽大空寺の住職の紹介で、参上つかまつった。なおよしと申すものや。」

峯澤様：「なにか事情がありげだな。畑で一汗かいて腹減ったことだし、

一緒に夕飯でも食べながら話しようか。」

そうべい：「この人ええひとや。やつとまともな人に会えた」
（「」

峯澤様：「刀で畑仕事はつかれるのうわ。

ははっ、 剣の稽古をしながら、野菜も手に入る。――
石二鳥や。」

なおよし「……」

峯澤政之助宅にて、質素な夕飯を囲みながら、

峯澤様：「話はよくわかった。やけど、その話には残念やけど、
乗れん。」

つつきー：「なんでやねん。わしらを助けるじょうもないっちゅう
ことか。」

峯澤様：「いや、そうではおまへんが、
ウチには隣の家の老婆がおってな。世話をせんといかん
のや。」

「やけど、そう落ち込むではおまへん。
もつともつともつともつともつともつともつともつと
つと、

腕の立つものを紹介しようわ。
あいつなら、必ず、助けになってくれるやろつて。
義侠心のあるやつやからな。」

そうべい：「ありがとうございまんねん。」

夕飯までごちそうしとただいて、この恩は一生忘れまへん。」

峯澤様：「いや、力になれなくてすまなかった。

紹介した奴は、毎日毎晩耄年中この近くの船の渡し場におるから

いまからでも行くとええ。日が沈むと家に帰ってしまうからな。

ほれ、紹介状と地図や。」

なおよし：「ありがとうございまんねんわ。」

3人の農民が岸边に佇む。

そうべい：「言われた通り、渡し場に来てみたが侍はいるのかの？」

井之川様：「おい、その3人。この川を渡るのか、わたりまへんのかどつちや。」

そうべい：「いや、峯澤様ちう方に紹介された人を待つとるんや。剣の腕がどエライ人がいるってきいてきてみたんやけど。」

井之川様：「おゝ。それはわてのことだぜ。わては剣の腕で負けたことが無いからな。」

つつき：「いやいや。刀持ってへんし、船頭やから侍では無いで

しょ。」

船頭：「信じてへんようだな。やあ、わての櫂さばきをみせてやるよ。」

鼻頭に一粒の飯粒をつけられ、硬直しているなおよし。（、111）

なおよし：「な、なんでおらがこないな目に。」

船頭：「黙つとけ。ちびつとでも動いたら。死ぬぞ。オラッ、いくぞ！」

船頭は櫂を大きく振りかぶって、なおよしに向かった櫂を振りぬいた。（ノ。）

ほんで……！ 米粒だけが、なおよしの鼻の頭から離れ、飛んでいった。

そうべい：「お見事。なおよし、そう泣くな。」

つつき：「かつて、櫂で戦った剣豪がいると聞いたことがあるが……」

船頭：「ははっ。参ったか……！ わしは、この渡し場の鬼番長こと井之川俊彰じゃ。」

峯澤様の頼みとあらば、断れねえ。それで何の頼みや。」

寺に帰ったそうべい、なおよし、つつきーと井之川様。

森島様：「待ちくたびれた。そのお方が、今度の仲間か。」

井之川様：「おうわ。おれは井之川俊彰。シブロクヨンキューな。」

森島様：「上手くいったみたいだな。わても上手くいった。」

つつきー：「…わても？」

森島様：「一人増えたから紹介する。恵向殿や。」

恵向様：「住職様からのご指名があり、

稲穂村にちーとの間修行に行くことになったんや。恵向

や。」

森島様：「そういうわけやから。」

つつきー：「やっぱりか…」

宿屋にて。そうべい、なおよし、つつきーと森島様、道覚様、恵向様、井之川様が広間でくつろいでいる。

森島様：「これで、4人集まったわけや。ほなら、あと3人だな。」

井之川様：「せやけどダンさん、戦がわかる人間は、少ないぞ。これで戦えるのか？」

森島様：「それがしの手にかかれば、問題無い。」

つつきー：「その自信はどこぞら？」

森島様：「数十回、小競り合いから大きな戦まで、参加してきたが、ウチが死んだことはいつぺんも無いからな。エッヘン。」

一 壁 一 ・ Y Y Y Y Y Y (。A。) ! ! !

恵向様：「なむあみだぶ、なむあみだぶ」

森島様：「あけてよ。お外は嫌だよ。」

そうべい：「森島様がいると話がややこしくなる。ちーとの間、追い出しとこつわ。」

道覚様：「それなりに考えはあるらしいのや。ウチや恵向様を雇ったのは、

野伏への心理的な備えとしてらしい。

いかんせん、話が噛み合いまへんのが残念や。」

井之川様：「おい！その念仏僧！うるさいから念仏をやめてくれ。」

つつきー：「それで、どうする。まともな侍は雇えるのか？」

井之川様：「まあ、見てな。わてに任しとけ。まあ、明日のお楽しみや。（＋＊）

強い奴を見つけてやるよ。」

なおよし：「油代ももったおらへん。もう寝て明日に備えようわ。」

~~~~~消灯~~~~~

一方、その頃、森島倫正は宿屋の中をうろついていた。

森島様：「部屋を追い出されちゃったし、どうしよ。」　　うろつろ。

宿屋の手代：「お侍様。どうやらかされたんやか？」

森島様：「（。　。　）／「その手に持つとるものはなんだ！！！！！！」

宿屋の手代：「ほ、箒でございまんねんわ。急にどないされました？」

森島様：「いやちゃうわ。それは刀だ！！その手に持つとるものはなんだ！！！！！！

！！」

宿屋の手代：「いや、まぎれもなく、箒でございまんねん。（　）（　）（　）

（ ； 。 ） （ ） 「

森島様：「いやちゃうな。確認のため箒ごとたたききるぞ！

もういっぺん訊くが、その手に持つとるものはなんだ！

「！！！！」

まさちゃん：「これは、刀、でございまつ。 Y（>|<、

Y

森島様：「やったら、君は侍だね。（ ^ ^ ） 「

まさちゃん：「…はい」

森島様：「今、侍を雇いたいちう人がいるんや。

ちーとばかりこの宿屋の主人のトコに案内してくれんか。

「

朝日が差し込む部屋。

恵向様：「南無阿弥陀仏 なむあみだ。 なむあみだ。」

そつべい：「ううわ。朝から念仏はやめてくれ、隣の部屋から怒られる。」

なおよし：「ホンマに、うるさいな。部屋の中なら小声で唱えればええのに！」



道覚様：「いや、あれこそ本物の念仏僧や。」

宿屋の手代：「でもどエライやね〜こないなにうるさいのに井之川はんはよく眠っ

てまんねんね〜。」

そつべい：「そつやね。気持ちよさそうにつて、お前は何者だ!!」

宿屋の手代：「この手代を務めております明津真之と申します。」

森島様：「うむ。通称 まさちゃん だ。」

つつきー：「そないなに勝手に人を雇つては困るんや。」

森島様：「これで、5人になりよったもん。7人まであと2人だもん。」

「まさちゃん!! 君は侍だよね?」

まさちゃん：「( > | < ) ううわ。 侍や。」

なおよし：「森島様に何をされたんや。宿屋の主人は許したのか?」

森島様：「ちゃんと許可取つてある。

この軟弱者を鍛えて返すといったら、許可してくれた。

$$\begin{array}{c} \cup \\ \wedge \\ \wedge \\ \cup \\ \perp \end{array}$$

なおよし：「まさちゃんはそれで、ええのか？ 人生狂わせれてるぞ！」

森島様：「手に持つとるものは何だ！」

まさちゃん：「（（（（（。；。（（（（刀。」

森島様：「それでよい。」

そうべい、なおよし、つつき、森島様、道覚様、恵向様、井之川様、まさちゃん、の8人は、大通りを歩いた。

森島様：「この近くにどエライ戦術家がいるんや。」

絵もすごく上手なんだよ。図師昭輝という奴や。

なおよし：「また、侍やないんやろつ？」

森島様：「……」

そうべい：「なんでやねん、黙る。やつぱり侍やないのか！ そうな  
のか！」

道覚様：「まあ、待て、武士でなくとも戦術家はあるやろうて。」

森島様：「着いたよ。こーこや。」

そうべい：「立派なお宅だな。」

ガラガラ

森島様：「森島がわざわざ攻めて来よったよ。将棋しよー！」

図師様：「久しぶりやないか。我が将棋の友よ。さあ、早速将棋しようか。」

つつきー：「板の上の戦術家。（T―T）」

図師様：「うむ。要するに、村の用心棒をしろと。そういうことかな。」

森島様：「引き受けてくれるやろか。我がほうにはええ戦術家が必要なのや。」

図師様：「馬鹿なことを言うでない。ウチは絵師だし、軍学のことも知らん。」

森島様：「では、将棋の勝負で決めようではおまへんか。」

図師様：「では、ウチが勝ったら、お主が愛用しとる将棋の駒を一つ貰うぞ。」

言っておくが、ウチは3連勝中だぞ。」

森島様：「将棋の駒一つか。よし、その勝負乗ったー！」

図師様：「フフッ。」

（これで、貧乏なあやつはウチの家でしか将棋ができなくなる。

将棋仲間GETだぜ）」

カチリちゅ音が部屋に響く、春だちうのに部屋に熱気が籠り暑い。

図師様：「アナグマ戦法できたか。ならば端を攻めるまでよ。」

カチリ

森島様：「堅い守りを崩せるやるか。

守りだけの森島と呼ばれた我が守りを見よ！」

カチリ

恵向様：「（それは、攻めを知りまへんと馬鹿にされとるのでは？）

」

図師様：「守りきれるやるか。

そないに囲っては、玉の逃げ道も無いぞ。王手！！」

ピシャン

森島様：「むむ、、、必殺！ちやぶ台返し！！」

図師様：「そうはさせるか！！！！往生際が悪いぞ！」

もみくちやになる2人。それを止める井之川となおよし。

森島様：「図師よ！ 戦場をなんでやねん嫌がる。

部屋の中で想像上の動物を描いて、

それで何が得られた！？どなたはんの役にたった？

言ってみろ！図師様。戦場に来い。その目で戦場を視る

んだ！

お前も来い。」

図師様：「それと、この勝負なんの関係があるんだ！負けをみとめるー！」

森島様：「お前は、この勝負に稲穂村の仕事と将棋の駒を賭けた。

勝負に「賭け」を入れた時点で、

この勝負は、盤上に閉じた勝負では無くなりよったんや。それとも、そないなこともわからんと、駒を進めとった

のか！」

図師様：「そないなこと知りまへんよ！」

森島様：「そないなんやから、絵に魂がこもりまへんんや。

筆を取るとき、どないな気持ちやった？

拙者は、この勝負をしとったとき、

村の存亡を思つて、打つとつたんや。貴様は何だ！」

井之川様となおよしが、2人を引き剥がし、席に戻す。

つつきー：「まあまあ、落ち着いて。とりあえず、ケツまで打つて、勝負を決めてからでもよいのでは？」

森島様：「…わかった。」

図師様：「…最初からそのつもりや。」

森島様が、自陣奥深くで眠つとる桂馬を手に取り、指した！

力チリ

森島様：「王手。」

図師様：「おい、今のはダメやろ！！桂馬はそないなに跳ねないやろ！！」

森島様：「そう怒るな。桂馬の上の乗つとるものをよく見る。」

図師様：「これは何や？どんぐりか？何ぞ顔が書いてある。」

森島様：「頭や。ゴチャゴチャゆつとる場合やあれへん、要は、この桂馬は、南蛮の伝説にあるケンタウロスなのや。」

°・°・\*・（°・O・）＝（、・\*）O

道覚様：「今の一手はやり直して依存はないな。」

図師様：「もちろん。本来なら反則負けやけどな。」

森島様：「ごめんなさい。」

図師様：「今度やったら、反則負けだぞ。（ギロリ）」

森島様：「（どうしたものか。ここで負けるのは悔しいし、図師の奴は強い。」

もう、ここは特攻しやるかいではおまへんか。命を惜しむな名を惜しめ！

角よ突撃せよ。飛車も突っ込め！進め玉。お前が一番強いのだ！）」

力チリ

図師様：「（手が無くなって勝負を諦めたか。」

もしくは、玉の逃げ道をつくるちうことか？）」

力チリ

森島様：「銀よ。桂馬、香車どもを蹴散らせ！」

力チリ

図師様：「自爆だな。こっちは駒得や。」

力チリ

森島様：「想定済みや。今こそ角よ。突撃せよ。」

力チリ

図師様：「ありがとはん。（オモロイし、全滅させよ）」

カチリ

カチリ

カチリ

数分後、森島様の持ち駒は玉だけになった。

図師様：「諦めよ。もう、負けたも同然や。フファッヒャッ。」

森島様：「玉。頑張れ。せめてその死を飾るがええ。突き進め！」

カチリ

図師は、有り余る持ち駒の歩を手にとった。

図師様：「王手かつ詰めだ！終わりだ！」

ピシャン

森島様：「負けはお前や。打ち歩詰めちう規則を知っておるか？」

持ち駒の歩から直接、王手で玉を打ち取ることはできないのや。」

図師様：「しもた。や、やりなおしを。」

森島様：「二度目は無いとのことやったからな。負けは負けや。

稲穂村に来てくれるか。」



図師様：「くそうわ。約束は約束や。いつ出立だ？」

森島様：「今すぐに決まっておるわ。」

新たに仲間に加わった図師様を連れて、宿屋に帰った一行。まだ、日は高い。

森島様：「これで6人揃ったな。あと一人はどうするか。」

つつきー：「流石に、今度こそ、侍を雇うや。」

変なのを雇うことになるのはもうこりこ

りや。」

井之川様：「おう、わてに任せとけ。とびきり強いのを雇うからよう。」

なおよし：「頼みまんねん。このまんまでは、長老達に怒られてしまうわ。」

戸のそばで、櫓を上段に構える井之川様、――壁――。／。

大通りに歩いている侍に声を掛け、応じた侍を試してふるいわけの算段である。

まさちゃんが大通りで、目ばしい侍に声をかけている。

森島様と農民達、僧侶達はゆったり、玄関に座っていた。

まさちゃん：「…そういうことやので、話だけでも聞いてもらえまつしやるか？」

その辺の侍：「ちつ。農民に雇われてたまるか！このがきめ！」

まさちゃん：「…すいまへん。」

森島様：「なやろかか来まへんなあ。まさちゃんでは役不足か。

道覚様どの、ちーとばかり行つて侍を連れてきてくれんか。

猫の怨霊にたたられておるから、

高名な念仏僧が除霊してさしあげると言えば、

来てくれるよ。」

道覚様：「人をだまんねんようなことはせぬ。それに侍を試すのは、ウチは反対や。

もし、強かったとしても、試したとあつては、気を悪くする。

弱かったら、井之川様の櫓にぶつたたかれて死んでしま

うわ。」

恵向様：「あむあみだぶ、南無阿弥陀仏」

つつきー：「オラは怖いよー 侍に斬られるよー」

そうべい：「そう、おびえるでない。つつきー。」

それに宿屋の主人が出かけとる間だけや。  
宿屋の主人は、もうすぐ帰ってくる。」

そのとき、高速で宿屋の入り口に向かってくる者があった。  
井之川様は、手に力を込めた。一気に緊張が走る。」

飛脚：「む。ご冗談を。」

宿屋に向ってきた飛脚は、入り口の手前でピタリと止まった。

井之川様：「……！！！！！」

森島様：「お見事。さあ、中へ。」

森島様：「試すようなことをして、すまなかった。こういうわけや  
ったのや。」

飛脚：「侍を用心棒として雇うちうことやるか。それは大変やね。  
森島様、これが積藁の国屋書店から依頼された本や。受け  
取りの確認を。」

森島様：「いや、そのまえに。野伏退治の件、協力をしてくれんか。

」

飛脚：「いえ、ウチは侍ではおまへんやし、

戦場の経験もおまへん。雇っていただけでも、。」

森島様：「せやけどダンさん、試験に合格したではおまへんか。た  
いした腕前や。」

飛脚：「お客様の荷物を安全に届けるのも、ウチの役目やるから。

賊に襲われたり、エライんや。危険を察知するこ  
とができて、

一流の飛脚と言えるんや。今のご時勢やる。」

森島様：「その能力欲しい。働かんか？」

飛脚：「申し訳おまへん。飛脚の仕事があるさかいに。」

森島様：「じゃあ。その本。受け取りまへん。」

飛脚：「は？」

森島様：「野伏退治を引き受けてくれへんと、注文した本受け取り  
まへん。

それで、積藁の国屋書店に届やるかかったよ！って言い  
にく。」

飛脚：「それは困るんや。どうか受け取っておくんなはれ。」

森島様：「だゝめ。」

飛脚：「うっ…。荷物はここに置いておきよるさかいに。」

森島様：「お主はそれでも、飛脚か!!」

それを生業としとるなら、命に代えても届け  
るべきやろ!!

そのために、危険を察知するほど、  
用心を払って仕事をしとるんやないのか?!

飛脚：「そないな言われても…」

森島様：「受け取りの花押なしで、積藁の国屋書店に報告しても納  
得せんやろうな。

ウチが届やるかいと文句を言えば、わかるよね。評判  
落ちるよ。

そうしたら、仕事の依頼、来るのやろか?」

飛脚：（、１１１）

森島様：「ほれほれ。」

飛脚：「その仕事引き受けまんねん。後生やろから、本の受け取り  
を。」

なおよし：「森島様が鬼に見えてきた。」

つつきー：「うむ、同感や。」

森島様：「名はなんと申す?」

飛脚：「鹿沼通泰。飛脚仲間からは、疾風のみちひろと言われとる。」

「

こうして、7人の仲間が集まり、村を守ることになった。

## 第1章 稲穂村からのお便り（後書き）

次回。侍は皆を置いて出かけてしまふ。その他大勢は、どうやって敵に立ち向かえばいいのか。ああ、どうしよう。

## 第2章 陣中からのお便り（前書き）

いろいろと困っていた農民達は、侍を含めた7人を成り行きで雇うことになってしまった。僧侶2人、子供1人を含めたこの集団で、稲穂村の危機にどうやって立ち向かうのか。関西風戦記、第2章が始まります。



## 第2章 陣中からのお便り

そうべい、なおよし、つつき、森島様、恵向様、道覚様、井之川様、まさちゃん、凶師様、みちひろ  
ほんで、大おじじと金一じいが車座になって  
薄暗い部屋の中で話しあっていた。

そうべいは、大おじじ、金一じいに土下座をしていた。

そうべい：「申し訳おまへんやった。侍7人雇うトコ、侍は1人しか雇えず、

よくわからん者をこないなに雇ってしまおったんや。」

金一じい：「野伏を退治した村は、侍を7人雇ったんだぞ！

それでも何人も亡くなりよったちゅうわ。

侍一人で、勝てるわけなからうわ。

前例通りやらんかい！この馬鹿どもめ。」

大おじじ：「まあ、まあ。侍を7人雇って来いと言えば、

侍でないものも雇うことになるやもしれんと思つてはいたのや。

それに、高名な極楽大空寺のお坊様が来てくださったとは心強い。」

金一じい：「ここまで前例をはずれてしまつては…わしには判断できん。

大おじじ、許可の判断は任せた」

大おじじ：「7人侍雇った村は、何人も死者がでたそうや。

それはある意味敗戦と言える。

そやが、僧侶を含めて、このもの達ならば、もしや……  
他に打つ手は、なかるうわ。よし！ この者達を雇  
うことを許す。

森島様どの。侍は森島様だけじゃ。この村を頼む。  
この村の農民達を指揮してくれ。」

森島様：「かしこまりたんや。そういえば、自己紹介がまだやった  
な。」

大おじじ：「そうやった。そうやった。すっかり忘れておったわい。  
」

森島様：「まずは、ウチが。森島 倫正と申す。

生まれも育ちも積藁の国の七根村やけど、  
仔細あつて3年ほど前から古河茅の国で浪人をしとる。  
今回、たった一人の侍となつてしもた。  
戦がわかるのはそれがしだけやので、  
皆の指揮は、ウチがさせてもらうことでことになりよつた。  
皆のために全力を尽くす所存や。」

道覚様：「ウチは道覚や。見ての通り出家した虚無僧やので戦には  
参加しまへん。

昔は武士やったさかい、多少は戦のことはお教えできる  
かと。

あと、托鉢でお会いしたときはどうかよろしゅうお願い  
申す。」

井之川様：「わしは權の使い手、井之川や。

權を振り回したら侍やらなんやら木っ端微塵や。ハハ  
ッハ！」

まさちゃん：「ウチは明津真之や。一番若輩ものやけどよろしゅう  
お願いしまんねん。」

森島様：「まさちゃん！君は侍か！？手に持つとる傘はなんだ！」

まさちゃん：「（（（（（。；。（（（（はい。ワイは侍や。  
手に持つとるのは刀や。」

金一じい：「??？」

図師様：「ウチは図師昭輝や。絵師を仕事としとります。」

戦の経験はおまへんが、のぼりや旗、鎧の意匠等なんでも任せておくんなはれ。

ほんで、将棋が趣味やので、将棋ができる人はぜひお相手を手を。

みちひろ：「ウチは鹿沼通泰や。戦の経験はおまへん。」

やけど、伝令時やらなんやらでお役に立てるかと存じまんねん。

積藁の国のB街へも3日あれば荷物を届けます。ご入用のときは、ぜひこのみちひろに。」

惠向様：「南無阿弥陀部、南無阿弥陀仏。」

森島様：「頼もしい仲間が揃ったな。〇（＾　＾）〇」

森島様：「では、初の作戦会議を始める。」

「まずは、そうべい。この村の現状と防衛につかえそうな

ことを教えてくれ。」

そうべい：「村は見ての通り荒廃しておるんや。

米や雑穀も冬を越えるだけで精一杯。

野伏は、40人の小集団やけど、種子島を持っており、  
やろかり強敵や。

村の人間の半数は既に逃散して今は、80人ほどや。  
戦えるものは40人おるかおらへんか…。

近隣の村に助けを呼べば、もうちびつとあつまるかも  
しれまへん。

この村は山と川に囲まれ、上手く堀や柵をつくれば、  
攻め難い土地だと思うで。」

つつきー：「いや、それはどうかいな。4面に分けたら、

10人しかおまへんか。この村、10人で守れるよう  
な広さではおまへん。」

森島様：「うむ。そうなのや。

やから、子ども、女、老人、問わず、戦には参加しても  
らうで。」

なおよし：「ちーとばかり待て、子供や老人ではそないなの戦力に  
はならんぞ。」

森島様：「よい。戦力になるかどうかが問題ではおまへん。

では問うが、戦いの間どこに、これらの者を置いておく  
つもりや。」

なおよし：「それは、そうやけど…賛成しかねる。」

森島様：「槍を持たせたほうが安全かもしれんぞ。致し方ないと諦めてくれ。」

「これで、80人だな。4方面に分けても20人や。他の村の援助か…、

いざちうときはみちひろに伝令に行ってもらわねばならぬな。」

森島様：「次に、まさちゃん！野伏の情報はなにか持つておるか？」

まさちゃん：「は、はい！昔は、野伏の頭領、公文とやは、人望に厚く、

豪放な人柄で知られておったんや。2年ほど前から、主家の滅亡とともに、浪人となり、当時の部下とともに野伏となつて

悪行をし始めたらしいんや。」

森島様：「そうか。それは貴重な情報や。ありがたい。」

なおよし：「まさちゃん。なんでそないなことを知つとるんだ？」

まさちゃん：「宿屋にはいろんな方がいらつしゃいまんねん。巷のうわさは大体耳に入るんや。」

道覚様：「（なるほど。それで手代を。）」

森島様：「そういうことや。それでまさちゃん。

古河茅の国は、なんでやねん野伏を捕らえることがでけへんか。わかるか？」

まさちゃん：「稲穂村は、となりの国の積藁の国との国境にあり、

不用意に兵を出せば、積藁の国を刺激しまんねん。  
また、討伐隊が来ても、盗賊は積藁の国にすぐに逃げ込める。」

森島様：「もし、古河茅の国に討伐隊を頼んで、要望を汲んでくれるような人はおらんか？」

まさちゃん：「そうやね。盛野様ちう気骨のある人がいらっしやいますわ。」

盛野様は、野伏の取り締まりのための出兵を家老の田中様さまに志願したそうや。

やけど、田中様さまが却下したと聞いていますわ。」

森島様：「エライぞ！まさちゃん。」

よし、これだけの情報があれば。後はなんともでは、具体的な作戦と作業を指示する。」

森島様：「まず、この村を城にする。井之川殿は土木工事を指揮してくれ。」

簡単な作業や。この地図の線に沿って、空堀と柵を作ってくればええ。」

地図をパサリ。

井之川様：「了解だぜ！」

森島様：「図師様。戦には旗が不可欠や。」

この文字の旗を作ってくれんか。材料は、むしろでかまわん。」

紙切れをパサリ。

図師様：「了解！」

森島様：「恵向様は、川原で大声で念仏していればええよ。僧侶だし。」

恵向様：「南無阿弥陀仏。」

森島様：「ウチはまず、農民たちを訓練する。」

みちひろと道覚殿はちーとの間井之川殿を助けてくれ。」  
「とりあえず、この方針で進めていく。」

ほんで、物見の番は、農民と雇われたもので、交代で行うからな。

皆、そのつもりで。では、作業開始だ！」

野原に森島様と竹やりを持った農民達が整列している。訓練を行っているのだ。

森島様：「まず、やりの構えはこうや。ほんでこうやって、突け！」

ビュッ

農民一同：「ザッ。」

森島様：「そうや。そないな感じや。次に、行進をいれるぞ！列を崩すな！」

農民一同：ざつ、ざつ、ざつ。

森島様：「うん、立派なもんや。さあ、掛け声をいくぞ！」

南無阿弥陀、なむあみだぶ、なむあみだぶつ、なむあみだぶ、なむあみだ」

農民一同：「南無阿弥陀、なむあみだ、南無阿弥陀仏、なむあみだぶ、なむあみだ」

森島様：「ええぞ！雰囲気できてきたやないか。（　　）」

なおよし：「お待さま」。ときの声とか、勝どきとかはやっぱりせんんで？」

森島様：「うむ。不要や。戦争で一番怖いのは、訓練された兵でも強い武器でもない。気合でもないんや。死ぬ気になりよった兵が一番怖いのがや。

やから、南無阿弥陀仏だけを唱えて、行進する方がええのや。」

農民一同：ざつ、ざつ。「なむあみだぶ、なむあみだぶ、南無阿弥陀」

図師様：「おい。書いてあったとおりの旗を作ったよ。」

森島様：「さすが、早いな。」「うむ。ええできた！」



つつきー：「なんてかいてあるんや。なんか見覚えがある文字やけど。」

森島様：「南無阿弥陀仏って書いた旗だよ。」

こっちの旗は厭離穢土欣求浄土ってかいてあるよ。○  
△△○

図師様：「ほんまにこれで、ええのか？」

意図はわからぬでもないが、これではまるで。：一向一揆みたいな。」

森島様：「大丈夫。あくまでこれは野伏への対策やから。ゝ（。、  
。）ノ」

森島様：「この旗1つ貰うよ。」

図師殿。悪いが、訓練をちびつとの間見ていてくれへんか？」

図師様：「どこに行くつもりや。ウチでは訓練は無理や。」

森島様：「ちーとばかり、みちひろに用が。」

あと、訓練は迫力を感じればええから、そないな方針でよろしゅう頼みまっせ！」

パタパタ。

森島様は、堀の工事場所ちかくでみちひろを見つけた。

森島様：「おーい。出番だぞ！みちひろ！」

みちひろ：「やっとやるか。それで、どないな仕事で？」

地図をパラリ。

森島様：「この旗を身につけて、この地図の通り村々を回ってほしいのや。」

できるかぎりの高速で。」

みちひろ：「ほぼ、古河茅の国中やね。この道だと結構かかるんやよ。」

2週間。いや、もうちびつとかかるかもしれへん。」

森島様：「大丈夫。それで十分。旗はこれや。」

みちひろ：「これは、南無阿弥陀仏。やるか??」

森島様：「そうや。これをつけて、村に入ったら、

南無阿弥陀仏を大声で唱えよ。それで、こう叫べ！

「南無阿弥陀仏！ 稲穂村は賊の討伐を行う！信仰あるものは稲穂村に來い！」

と。、（。、。、）ノ」

みちひろ：「なんだかよくわかりまへんが、走って叫ぶだけの仕事なら、簡単そうや。」

信仰心に問いかければ、確かに人は集まるでっしゃろ。

「

森島様：「よろしくたのむよ！ みなさんの命運はお主にかかるとるん

だ！

食事はどこぞで振舞ってもらえると思っわ。  
やけど、一応路銀を渡しておくよ。」

チャリン。

みちひろ：「三文？　これだけ？」

森島様：「これだけ。」

みちひろ：「鬼やね。」

森島様：「大丈夫だよ。みんな驕ってくれるから。やさしいもん。  
食料は現地調達で。」

みちひろ：「ううわ。」。、llll

森島様：「さあ！走れ！飛脚。どこまでも走れ！明日へ向かって走れ！」

みちひろ：「まだ、なあんも準備できてまへんってば。鬼。（T  
T）」

土木工事の休憩中。

図師様、井之川様、道覚様が、話をしていた。

道覚様：「図師殿は、森島様と親しいようやけど、いったいあいつは何者なんだ？」

図師様：「ただの浪人ものや。3年前までは積藁の国で仕官しottaらしい。

そのときからの付き合いや。

なんの仕事をしottaのかを質問したことがあるが、  
まともな答えは返ttてきたことはないな。

察するに、当時の仕事は、書庫の管理と、寺社の見張り  
やろうか。」

井之川様：「やあ、どう知り合ttたんや。侍と絵師にそう接点はな  
いやろう？」

図師様：「積藁の国のさる由緒あるお寺に屏風を収めたのや。  
そうしたら、あやつは文句をつけてきた。」

道覚様：「どないな？」

図師様：「お前の絵には、発見が無い。ただキレイなだけや。  
美しいだけでええのか！？ttてね。いちゃもんや。」

井之川様：「確かに、森島様が言いそうなことや。」

図師様：「やから、ウチは言ttてやttたのや。  
やttたら、お前が手を加えてみよ！ttてね」

道覚様：「それで、何ぞしでかしたのか？」

図師様：「なんと、セミの抜け殻を拾ってきて、屏風に貼り付けた。そうしてから、屏風にこう書いたんや。

「さて、この絵に蝉は何匹いるでっしゃろ？」

道覚様：「意味不明だな。というよりもガキの遊びだな。」

図師様：「その翌日、森島様は積藁の国を首になりよった。

それで、浪人として流れてきたのや。

将棋の会で、偶然再会した時は驚いたものや。」

井之川様：「3年もなんで、浪人のまんまなのや。仕官はしようとしとるんか？」

図師様：「いや、浪人のまんまやったわけではおまへん。

再会した時は、古河茅の国家老の田中様の部下の一人として仕官しとった。

その後、奇行をしたらしく、追い出され、

何年かは、本屋の用心棒をしとったらしい。」

道覚様：「また、奇行か。……本屋に用心棒が必要なのか？？」

図師様：「きょうびは盗んで売りさばくやからもおるからな。

そうそう、積藁の国屋書店やったやろか。その店は。」

井之川様：「聞けば聞くほど、変わった奴だな。かわいそうな気もするが。」

図師様：「あれはあれで、日々楽しそうやからええではおまへんか。

奇行をしていても、それが正攻法だと言い張っとる。  
まあ、意外と正しいことも多いがね。  
さあ、そろそろ仕事に戻ろうか。」

井之川様：「トコで、図師殿、今そつちでは何の作業をしとるんだ？」

図師様：「ああ、ウチは、今、農民達の服を朱色に染め付けとるよ。もう、目が覚めるような真っ赤な色や。迫力重視でね。そのうち君達の服も赤に染めるから。」

井之川様：「全員赤か。確かにそれは怖いにちげえねえ。」

朝早く、森島様と道覚様A、図師様とそつべいが道に立つとる。

森島様：「道中の飯まで準備しとっただきかたじけへん。」

道覚様：「もし、留守中に野伏が攻めてきたら、手はず通りに防戦を。」

そつべい：「はい。道覚様、お侍様、お気をつけて。敵の本拠地に行くのやろから。」

森島様：「周辺の地形も探るから、1週間以上留守にする。留守中はくれぐれも頼む。」

図師様：「まかしといてくれよ。」

森島様：「うむ。ほんで、3つの巻物を書いておくから、非常事態になりよったら、それをあけてくれ。

指示が書いてある。非常事態になりよったらだぞ。それ以外は役立たないと思うわ。

いや、非常事態でも役立たないかもしれへんから。そのときはあしからず。」

図師様：「いったい何が書いてあるんだ？」

森島様：「それは言うては意味がないやろ？」 + \*

そうべい：「気になるな。」

森島様：「ウチの大事な戦略なのや。大切に扱うのだぞ！」

図師様：「ほならお気をつけて。」

森島様：「それや、行って来るよ。」

2日後、

ザクッ、ザクッ。

道なき道を歩く二人。

道覚様：「ほんまにこつちなのか？」

もう、人影も無いし、ここはもう積藁の国では無いのか？？」

森島様：「ええのや。ええのや。これで。」

道覚様：「どこに行こうとしとるのや。」

わしは不安じゃあない。もしや戦から、逃げ出したのか。」

森島様：「着けばわかる。」

実は、積藁の国屋書店本店に行きたいのや。  
月刊菜根譚の発売日なのや。」

道覚様：「何！ こないなときに何を申すか！ 本屋だと！ ばか者！」

森島様：「まあ、まあ、やから、着けばわかるって。  
落ち着いて。怖いな。ボウズやろ。」

ザクッ。ザクッ。

そないな風にして、2人は積藁の国の中心であるB街へ向かったのだった。



みちひろは走った。できるだけ早く、村々では言い含められた言葉を大声で叫んでいた。寝る時間も最小限にして、みちひろは走った。南無阿弥陀仏の旗をたなびかせながら。

皆、南無阿弥陀仏と書かれた旗と、飛脚が叫ぶ内容に驚いた。

みちひろは、全力で走った。

そのひたむきな姿に、心を打たれ、応援する者や一緒に走るものまででてきた。

そして、走る飛脚のうわさは村々を駆け巡った。

某村村民達数人が集まって、飛脚の走りを見物している。

某村民：「キャー。飛脚さま！頑張ってる。」

みちひろ：軽く手を振り、

「南無阿弥陀仏！ 稲穂村は賊の討伐を行う！信仰あるものは稲穂村に来い！」

イエエー！

B村僧侶：「これをお飲みおくんはなれ。粥でござい まんねんわ。」

みちひろ：「ありがとう。走りながら食べるよ！ みんなありが

とう！」

飛脚は大きく手を振った。

飛脚は走りながら思った。

みちひろ：「（ウチは毎日毎晩耄年中、他人のものばかり配達し  
った。」

それに誇りを持つとった。でも、今はどうやるうわ。  
走ること、そのことが、ただ気持ちええ。」

みちひろ：「（それに皆が、ウチを応援してくれる。走るウチを  
援してくれる。うつつ。）」

みちひろ：「（それが、ムカシからのウチの生活に無かったものや。  
確実に荷物を届けるそれがみなやった。

せやけど、今、気づいてしもた。ほんまは、ただ走  
りたかったのや。

その、走る姿を賞賛して欲しかったのや。）」

みちひろ：「（そもそも、森島様の話に乗ったのは、心のどこぞで、  
今の生活をしょーもないものと感じとったからかもしれ  
へん。

確実な配送を人一倍頑張っても、当たり前前の扱いをされ  
て、賞賛されることはなかった。

飛脚やからしゃあないと思つとった。

その身分を越えたことを望むべきでないと思つとった。）

」

みちひろ：「（依頼人が望まなくても、全力で毎日毎晩耄年中走っ

た。

それは、確実に早い配達のためやない。  
心にわだかまりがあつたからや。

心に毎日毎晩、年中暗い霧がかつとつたからや。

あの暗い気持ちを、晴らしたかつたからなんだあつっ

！……！」

みちひろの目から涙があふれる。

みちひろ：「（今、ウチは最高に気持ちええ。走ろうわ。みなをか  
けて。皆が応援する限り。」

走ること。それだけが、今のウチのみなやったのや。

一步を踏みしめて。さあ、走ろう。」

こうして、40の村々を10日間で走り抜けた飛脚の伝説が生まれ  
たのだった。

古河茅の国城内。大名、見目誠史郎様と、家老、田中証信様、及び  
家老、古郡明丞様が、

一連の騒動について、相談をしていた。

昼の日差しが差し込み、古郡様の白髪がキラキラ輝いていた。

田中様：「上奏いたした報告書の通り、

今、古河茅の国では一向一揆が起きようとしておるんや。

一向一揆を起こそうとしとる首謀者達は、  
どうやら野伏の討伐と言い張っとるらしいんやが。」

見目様：「なんでやねんや。」

わが国の浄土新宗の総元締め、極楽大空寺の住職は、な  
あんもしておらんようや。

むしろ、事態の成り行きを心配しとるようやったが。」

田中様：「いえ、ウチの知る範囲では、極楽大空寺の恵向様と申す  
ものが、

一味の首魁のようや。単独で、事起こした可能性もあ  
るんやが、

住職の関与は当然あるでっしゃろ。」

古郡様：「元と言えば、田中殿、そなたが悪かろうわ。稲穂村で  
の野伏を野放しにし、

年貢もきつとりたてとったそうな。ほなら、一揆も起  
きようわ。」

田中様：「その件は面目ない。稲穂村は積藁の国との国境。簡単に  
は兵を出せまへんやった。

実は、部下の盛野から、何度も要請はあったんや。

そのときに、兵を出していれば。そう悔いてなりまへん。

「

見目様：「まあ、古郡、責めるでない。ウチが田中でも同じ対応を  
したやろうわ。」

田中様：「盛野を差し向けて、必ずや、一揆を鎮めてみせまひよ。」

古郡様：「田中様。例の一揆を広めて歩く飛脚の件やけど、まだ捕まえることができんのか。」

田中様：「はい。飛脚は逃げ足が速い上、神出鬼没で、どないな道を通るか予想できまへん。

ウチに、内通者がいるのではおまへんかと、疑つとるほどや。」

古郡様：「けつ。人ひとつ捕まえるのに何日かかっておるのや。こないな奴が筆頭家老だと。笑わせる。」

見目様：「言葉を慎め。筆頭家老にしたのはウチなのだぞ。」

古郡様：「ははっ。」

見目様：「田中様、早急に対処せよ。シッパイを繰り返すようなら、次は無いと思え。」

田中様：「かしこまりたんや。すぐに対処いたしまんねん。」

田中様は立ち上がり、退出する。  
パッ。サササッ。

古郡様：「へっ。格好ばかりがよい若造が。」

見目様：「古郡はそう言うが、田中は周囲の評判もよく、人当たりもやわらかい。

毎日毎晩壹年中にこにこしとる好人物や。

付き合いもええし、教養もある。

今回はシッパイしたが、仕事はできるちうわけや。」

古郡様：「やけど、悪い話が無いわけでもなかるうわ。

能力ある者を貶めるやりかたで潰しとるちう話や、  
薄情で、笑顔で人を切るちう話も聞く。」

見目様：「それは、妬みからくる噂話ではおまへんかと思うのや。  
能力あるものにはよくあることや。」

古郡様：「果たしてそうなのかのう。」

見目様：「古郡。ちびつとはその毒舌を止めぬと、身を滅ぼすぞ。」

古郡様：「もうこの歳で、生き方はかえられまへんのや。はっはは。」

「

道覚様と森島様は、野伏の偵察に向かい、野伏の本拠を素通りして、  
積藁の国屋書店に向かっていた。

道覚様：「ほんまに良かったのか。野伏の偵察にいかんと、こない  
なところをぶらついて。」

森島様：「うむ。問題はなあんも無い。月刊菜根譚の発売日にちょうど着いた。」

道覚様：「冗談かと思うたが、本気らしいな。泣けてきた。」

森島様：「よしよし。泣いちゃだめだよ。ほら、積藁の国屋書店はあそこだよ。」

男2人、積藁の国屋書店にいる。  
ガサ、バサツ。森島様は、本を整理していた。

道覚様：「いったい何をしとるのや。本を五十音順にならび変えたりして。」

森島様：「ちーとばかり、待っててね。すぐ、開けるから。」

道覚様：「あけるってなにを？」

森島様：「はい！これで、完成。」

「今、ウチ達以外にだれも客はおらへんよね。」

道覚様：「おらへんが、なんでそれを聞く？」

森島様：「ふっふっふっ。驚くがええ。」

森島様は、本の棚をぐいつと押した。  
すると、本棚がくるっと回った。

ガタツという大きな音と共に、暗く小さな通路が開いた。

森島様：「これどエライでしょ！ウチが作ったのや。本の重さが鍵の役目をしとるんだよ！」

道覚様：「仕組みは微妙に凄いが。うゝん。見た目が、しょぼい。」

森島様：（Ｔ　Ｔ）

道覚様：「そないな顔しなはんな。で、どこに繋がってるんや。」

森島様：「閻魔大王がいるトコ。」

道覚様：「どこに繋がつとるの？」

森島様：「きょうび、道覚様突っ込んでくれへん。」（Ｔ　Ｔ）

道覚様：「で、どこだ！」

森島様：「行けばわかる。戸を閉める必要があるから、先に行つてくれへんか。

どなたはんかにあつたら、森島の仲間じゃ！わはは。といえばええよ。」

道覚様：「やあ、この暗い通路をとりあえず行けばええんだな。」



モゾ、モゾ。

道覚様は這い蹲りながら、進んだ。

道覚様：「（このような通路簡単にはつくれるものではない。

あやしい通路や。森島っちゅう奴は何者なんだ？

積藁の国屋書店になんてこないな通路があるんだ？

まあ、考えても始まりまへんか。ウチは人生を捨てた身や。

ちびつと、森島様のボケに翻弄されてみるか。フフッ。

）

道覚様 A：「先に着いたのやけど、森島様はどうしてこないのや。遅すぎる！

ここはどこなのや。結構広いお屋敷のようやけど。」

居合わせた侍：「む、お主何者や。」

道覚様：「……（どうする。わて）……「托鉢中の道覚様や。」  
チリーン。

居合わせた侍：「であえ〜であえ〜。曲者や！！！」

森島様：「なんでやねん、道覚、お主は捕まっとるのや。」

居合わせた侍：「申し訳ない。森島様のお仲間とは露知らず。」

森島様：「ええよええよ。この虚無僧の手違いのせいやから。」

道覚様：「つい、反射的に言っでもた。」

森島殿の仲間と言わねばならんことは知っておったのやけど。」

森島様：「道覚様も結構抜けてるな。」

こないな所に托鉢僧はいまへんやろ。ははは。」

道覚様：「くそうわ。森島めに笑われた。」

森島様：「さあ、早くいくぞ、道覚殿。」

積藁の国家老、伊波忠道様のトコに行くのやから、身なりを整えておけ！」

道覚様：「積藁の国の家老やと！　ちうことは、お主は積藁の国の問者なのか！」

森島様：「問者。うゝん、そういう表現は悪役みたいで嫌いだな。」

公式の配置では、積藁の国屋書店の用心棒（休職中）で只の浪人なんや。

絵師は勘違いしてたけれど、積藁の国で首になりよったから

古河茅の国に行ったわけではおまへんや。」

道覚様：「そうか。なんか見えてきたぞ。」

もせやけどダンさんて、古河茅の国を動揺させるのが、本当の目的か？

農民達に協力したのもそのためか！」

森島様：「一部分あたりやけど、それはちゃうわ。

ウチは、古河茅の国の安定をも求めとるのや。

ウチは、世界はより安定した形になるべきだと思うとるのや。

天下統一がなされ、戦がなく、国境も無い世界をウチは求めとる。

動揺させたのは事実やけど、それは目的では無い。」

道覚様：「農民達をだましたのか！」

森島様：「ウチがいつ、古河茅の国のものと言った？

自己紹介の際も、積藁の国のものとはつきり言ったではおまへんか。

それに、農民達には悪いようにはせん。ウチを信じてくれ。

ウチは嘘はそないつかへん人間や。」

道覚様：「む。狐に化かされとる気分やけど、

ここまで来よったら腹をくくるしないか。むむむ。」

森島様：「なむあみだぶ なむあみだぶ なむあみだぶ」（＊ハ－

ハ）ノ

歌いながら、テクテクと森島様は歩いていく。

道覚様：「（稲穂村の農民達、船頭や手代、絵師に飛脚に念仏僧、

全員だまされておるぞ、ああ、心配や。

思い返せば、一揆風の旗や訓練、妙やった。単に野伏

対策とは思えん。

エライことになっていなければよいのやけど、  
くく」

「ここまでの説明」

森島様と道覚様は、野伏の偵察に向かい、野伏の本拠を通り過ぎ、積藁の国屋書店に向かった。

積藁の国屋書店には地下通路があり、それは稲藁の国の家老、伊波忠道の屋敷へと繋がっていた。

森島様と道覚様は、伊波忠道様と面会を果たしたのだった。

「なんでやねん。さつき読んだわ！」

森島様：「お久しゅうございまんねんわ。伊波忠道様。」

伊波様：「ホンマに、ご苦労やった。」

これだけ古河茅の国が乱れれば、古河茅の国はもはや積藁の国のもの。

凄まじき働きやったな。

それに、毎日毎晩亅年中古河茅の国の内情をあれほど詳細に伝えてくれて、

今回の戦は勝ったも同然や、ほんまに役立ったぞ。」

森島様：「ありがたきお言葉、恐縮至極に存じまんねん。（、）」  
「閻魔大王様。」

伊波様：「そう照れるでない。」

まだ、もうひと働きしてもらわねばならんな。トコで、

そこのボウズは、何や。」

道覚様：「拙者は、旅の虚無僧で、道覚と申す。只の虚無僧や。」

森島様：「古河茅の国内での我らの味方になる勢力の一人や。  
前回の報告書に書いてある通りや。閻魔大王様」

伊波様：「あゝあの道覚か。エライ騒動に巻き込んでしもたなあ。  
して、森島様よ。この虚無僧をここまで連れてきた訳は  
？」

森島様：「いえ、意味はおまへん。せやけど、稲穂村への帰り道で、  
やっておかねばならぬ仕事がありました、  
そのために、必要不可欠やのでござい まんねんわ。閻  
魔大王さま」

道覚様：「……」

伊波様：「まあ、よい。お前のやることは毎日毎晩年中よくわか  
らんが、

ケツには最良の結果になる。自由にするがよい。」

森島様：「はい！（、）ハ／ 閻魔大王様！」

伊波様がふすまをガラガラと開ける！

伊波様：「皆の者に伝えよ！出陣や」

森島様：「はい！閻魔大王様」

伊波様：「森島よ。なんぼ褒めたからとて、照れすぎや。

閻魔大王やらなんやらと何回も呼ぶでない。

そないなに嬉しかったのかのう？」

森島様：「う、嬉しくなんやろかいもん！（・・。）ゞ」

道覚様：「（…森島様の、ひげ面でかつ照れたあの顔。

この世のものとは思えん。見なかったことにしようわ。

わわわ… そないな顔でこっちを見るな！鳥肌が立つ

てきた。）」

がしゃ、がしゃ、ざっ、ざっ。

積藁の国の部隊、約1万が出発した。その行進の中に、道覚様と森島様の姿があった。

森島様：「しもたゝ。月刊菜根譚を買うの忘れた！！」

道覚様：「何を言ってるんだ！この戦が終わるまで、それどころではなかるうー！ばか者。」

それに、古河茅の国の積藁の国屋書店でも買えるやろ。」

森島様：「わかってへんな。月刊菜根譚は、ウチ達の伝令道具なのや。

月刊菜根譚への懸賞応募の手紙に、暗号で報告を書いて送るんや。

月刊菜根譚のページは、指定された方法で読むと、重要な伝令が読みとれるのや。

やから、一ヶ月に一回は、必ず読み、懸賞に応募せんといけへん。

今、戦にでたら、今月号を買い逃してしまうわ。それはまづいのや。」

道覚様：「あの月刊菜根譚にそないな秘密が…。やから、懸賞があたりまへんのか。」

森島様：「懸賞？ウチは毎回当たるよ。一応、公平な抽選がなされとるはずや。」

道覚殿は、運に見放されてるな。はははっ。」

道覚様：「なんてことや。またも森島様に笑われるとは。くっくく。くく。」

森島様：「あつ。あそこに、なんか良さげな本屋が。」

月刊菜根譚あるかもしれへん。ちーとばかり買いに行ってくるよー。」

(^o^)/

道覚様：「ちよつと！ 隊列を乱しては、罰を受けかねんぞ。

く… 待て！ 一人は嫌や。わしも行くゝ！」

様々の方向に交錯する思い。それに伴う事態の急変。

だが、まだ古河茅の国の稲穂村は、まだその頃は平和だった。

まさちゃんと井之川様、農民達が、柵をつくり、堀を掘っていた。

まさちゃん：「ウチの柵も完成したんや。」

井之川様：「よつつしやあ。

あとは、堀をどれだけ深くできるかだな。一旦休憩にするか（＾－＾）」

まさちゃん：「井之川様はんは、凄腕の剣士なんやね。

ど、どうしたら強くなれるんやるか？」

井之川様：「剣士？まあ、使うのは權やけどな。

なんだ、小僧、お前は強くなりたいのか？」

まさちゃん：「はい。井之川様はんもそうべいはんやなおよしはん



も、

皆力持ちで、大きな石を軽々と運びまんねん。

それに、これから戦をするんでっしやる？強くないと殺されちゃうわ。」

井之川様：「そうか。確かに不安やろうな。わても、お前くらいの時は、不安やった。」

ある奴に剣の極意を教えられるまでは。」

まさちゃん：「極意。？」

井之川様：「いや、極意ちうほどのものでもないやろか。へへ。」

「昔、わたの船に客として乗った奴がいたんや。」

そいつは、わたの權になんでやるか、

わいもよーしらんが興味を示したちうわけや。

訊くと、なんでも、近いうちに決闘をするらしい。

その戦いで權を使いたいと。」

まさちゃん：「決闘に權：？？」

井之川様：「そうさ、笑えるやろう。刀で切られておしまいだと思うやろ。」

やから、わても可笑しくて笑っちまったぜ。

權で剣士を倒すなんて発想、考えたこともなかった。

妙にその発想が気に入ったから、その權をそいつにくれてやったんや。」

まさちゃん：「それで、決闘に勝ったんやろか？」

井之川様：「ああ。やろかり手ごわい敵やったらしいが。無傷で戻

ってきたよ。

そいつ、ええ顔してたなあ。」

「それで、わては気がついたんや。刀でなくても、例え、櫓のようなありきたりのものでも、

使い方次第で、櫓の範疇を超え、刀よりも強くなれるってな。。

負けた剣士の方は、刀を超えた発想ができなかった。やからそれまでやったってね。」

まさちゃん：「それで、櫓を使う剣術を。」

井之川様：「別に櫓で無くたってええんだぜ、宿屋の手代には手代なりの「剣術」があってもええと思っ  
うぜ。

よく、森島様が「お前は侍だ！手に持つとるものはなんだ！」

っってお前に訊くやろう？

あれは、わてが思うに、刀が無くて、簞でも、箸でも、持つてるものを自由に使えば、侍のように戦える、もつともつともつともつともつともつともつともつと

自信を持って！って言いたいんやろうぜ。」

まさちゃん：「森島様がおっしゃることにそこまで意味があるとは思えまへんが…

手代なりの剣術やろか…。ウチにできるでっしゃるか？」

井之川様：「できるさ。小僧が、手代でありながら、手代の範疇を超えられればの話やけどな。」

井之川様：「さあ！仕事すつぞ！」

まさちゃん：「はい！」

積藁の国で、大規模な軍が出発したその頃、古河茅の国も、稲穂村の一向一揆に対して、鎮圧の兵を出した。一揆の噂が広まってから一週間で兵を派遣した田中様の迅速さは、賞賛に値する。その部隊の隊長が、盛野厳造。盛野厳造は、気骨のある武将として有名で、歴戦の勇士である。

盛野様：「おい！ 稲穂村へ向かった使者はまだ帰らんのか！？」

伝令：「 稲穂村からの使者が帰還なされました！」

その時、使者として稲穂村へ行っていた蒲原亀生が苦い顔をして歩いて来るのが見えた。

蒲原亀生。通称かもりん。かめりんと呼ぶと激怒するが、穏やかな知識豊かな武将である。

かもりん：「申し訳おまへん。交渉はシッパイやった。」

盛野様：「そないなに一揆勢の意思は固いのか？一揆方は、どんな様子なのや。」

かもりん：「奴らは、まだ、この期におよんでも、野伏退治と言いつ張つてい まんねん…

やけど、南無阿弥陀仏の旗をかがげ、赤い装束に身を包んだ姿、

あれはもはや、野伏退治の様相ではございまへん。  
南無阿弥陀仏を唱え、竹やりを構えて、猛然と突き進む訓練する様子も、

鬼気迫るものがあつたんや。決死の形相とはあのことや。  
しかも、一揆勢には女や子ども、老人まで含まれとるよ  
うや。

奴ら、全滅もいといまへんちうことでっしゃる。」

盛野様：「むむむ。それはまずいぞ。奴らは死ぬ気か。

それに、女、子ども、老人に僧侶。  
わしら、戦で勝つたとて、無傷ではいられんぞ。  
殿とわしの声望は地に墮ちるやろつて。」

使者A：「一揆勢の首謀者とみられる恵向様と接触したのやが、  
ひたすら念仏を唱えるばかりで会話になりまへん。  
問いせやけども、「一揆では無い」と言い放ち、  
すぐに念仏をしまじめたんや。  
これは交渉の余地無しちうことでっしゃる。」

盛野様：「（そこまで思い詰めておつたのか。わしが独断でも野伏を退治しておれば。

これは、わしのせいなのや。対応を誤らなければ、こ

ないなことには。

すまぬ。稲穂村の農民達、田中様。

この戦。ウチが悪魔と呼ばれようと、どれだけ泥にまみれようと、

古河茅の国中に火が広まる前に、この盛野様がみなを賭けて、

収めなければなるまいて。」

盛野様：「使者Aよ。もう交渉はよい。もう進むしやるかさそうや。  
（…修羅の道へ）」

使者A：「はい。申し訳ございまへん。」

盛野様：「苦勞をかけたな。」

こうして、盛野様は、重い心をひきずりながら、稲穂村へ進軍したのだった。

盛野厳造様が兵を率いて稲穂村に向かったその頃、  
稲穂村では会議が開かれていた。

そうべい：「どうしたもののか。どうやらわしらは一向一揆と間違われてしもたようや。」

なおよし：「南無阿弥陀仏の旗なんてつくるからだ！指示した当の本人はおらへんし！」

井之川様：「慎重に使者をあつかわなかったわてたちも悪いんや。  
あの使者め、さらさら話を聞こうとせんし、まるっき  
し。」

まさちゃん：「皆はんそないなこと言ってもはじまりまへんし、何  
ぞ対策を考えまひよよ。」

つつきー：「今度こそ終わりだ。侍達に斬り殺されるだ。」

恵向様：「南無阿弥陀仏、なむあみだぶ、」

そうべい：「そういえば、森島様から3巻の巻物を貰ったんや  
ったよね。凶師様。」

凶師様：「ああ、3つの巻物、ちゃんと持ってきたんやよ。  
開いてみまっしゃるか。今は危機やろからね。」

するする。巻物を広げる凶師様。

~~~~~森島倫正の超凄い大作戦~~~~~  
~~~~~

みんな、元気？ 道覚はなんとかぎりぎり元気や。

ウチの予想では、みんな一向一揆を起こした首謀者になってるはず

だよ。

やったね！ 恵向様もどエライね。一揆を起こしちゃうなんて。（

$$\begin{array}{c} - \\ \wedge \\ \wedge \\ - \\ \smile \end{array}$$

みちひろ殿が古河茅の国中に、一揆の仲間を集めるために触れ回つておるから、

事態の早期收拾を、田中様たちは考えるはずだね。

この巻物をみるってことは、危機やるか？

ワイが思うには、盛野様が兵を率いて進軍しきてるんでしょ。(

、  
艸  
、  
)

でも、大丈夫。積藁の国から援軍がすぐにくるから。何日かもちこたえればええんだよ。

一巻目はこれだけだよ。もし、大当たりやったら次の巻も見てね。必ずだよ。

$$\begin{array}{ccccccc} \wr & \wr & \wr & \wr & \wr & \wr & \wr \\ \wedge & \wedge & \wedge & \wedge & \wedge & \wedge & \wedge \end{array}$$

静まりかえる室内。

そうべい：「森島様の予想の範囲内かどうか。」

井之川様：「わしらは上手く転がされておったようだな。」

図師様：「なんかむかつく文面や。まあ、次にいくか。」

~~~~~森島倫正の超凄い大作戦~~~~~第二巻~~~~~

はずれ

図師殿は、ああ見えて生真面目やから、絶対一巻、二巻、三巻とやらんでいたら、
順番を守ってあげるんだよね。融通きやろかい奴だな。やから将棋で負けるんだよ。

ごめんなさい。やりすぎたんや。ちゃんと書いたさかい次の巻を読んでおくんなはれ。

~~~~~

くちやくちやくちや。      ビリビリッ。

図師様は、無言で巻物第二巻を破り捨てた。  
そして、三巻目を開いた。

~~~~~森島倫正の超凄い大作戦~~~~~第三巻~~~~~


これが、ほんまの作戦ね。奇抜な作戦だけれど、必ず実行してね。まず、今回討伐隊として来る盛野厳造。この武将は一本気で、ええやつなんや。ちーとばかり、頑固で思い込みが激しく、融通がきかないところもあるけど。

盛野様は、女、子ども、老人までいる一揆勢と、戦いたくないと心から思っと思うんや。

でも、命令だし、今回の一揆の責任も感じて、全力で向かってくる。トコで話は変わるけれど、図師殿は、将棋はちゃんと持ってきておるやろか??

実は盛野様、将棋が大好きなんや。でも下手の横好きで、超弱いよ。ウチも実は戦ったことがあるけれど、守ってるだけで勝てちゃうの。

ほんでや。上手く交渉して、図師殿は、盛野様に将棋での決闘を申し込んでおくんなはれ。

盛野様は負けず嫌いやから、挑発すると何回でも乗ってくれるよ。

どエライ作戦でしょ。あれ、信じてへん人もおるやろか?

でも、将棋で人を殺さんと済む可能性があるなら、盛野様も乗ってくれるよ。

ほんで、判断、引き際を誤る。

図師様。意図はわかったよね。やあ、頑張つて。できる限り長く時間を潰してね。積藁の国の軍が到着するまでやら。

あと、打ち歩詰めなんかしちゃだめだよ

~~~~~

図師様：「話は理解した。でもなんか気に食いまへんなあ。」

つつきー：「負けるなよー!!」

図師様：「わかってるよ。問題はどう交渉するか。だな。」

盛野様は、稲穂村に部隊を率いて進軍している。  
森島様からの秘策を胸に、図師様はこれに立ち向かう。  
稲穂村の運命はいかに！

盛野様：「あれが、稲穂村や！！」

皆の者、心しかかれ！あの村は只の村ではおまへん。  
あの村は、城ぞ！城の中にいるものは、  
僧侶、老人であつても、兵隊ぞ！臆するなよ！」

兵士一同：「はい！！」

盛野様が馬を進めたその時！その目に妙なものが映つた。  
それは、橋の上に、ドカンと置いてあつた。

盛野様：「あ、あれは何や。妙に心をくすぐる、あの形は！」

そこには、どエライでかい、人の背丈ほどの大きな将棋の駒（金将）があつた。

盛野様：「な、なんでやねん金なのや。ちゅうよりも、なんでやねんこないなトコに。」

その時、図師様が、将棋の影から、ひょこりと顔を出した！

盛野様：「何者だ！」

図師様：「ウチは、あんはんがたが一揆扱いしとる

稲穂村を助けるために雇われた者や。（〃　〃）

ご心配には及びまへん。危害を加えるつもりはおまへんから。

ウチは、あんはん様にご提案にきたんや。

盛野様にとつてもよい賭けだと思ふのやけどなあ。」

盛野様：「すでに使者との交渉を蹴っておるではおまへんか。いまさら交渉やらなんやら…」

図師様：「交渉ではおまへん。」

ウチが提案するのは、この村の存亡を賭けた勝負の提案や。」

盛野様：「オモロイ。話くらいは聴いてやろうわ。」

図師様：「ありがとうございますまんねんわ。提案するのは、将棋の勝負や。」

もし、盛野様が勝ったなら、稲穂村は無抵抗で降伏しまひよ。

もし、ウチが勝った場合は、もういっぺん将棋の勝負を繰り返しまんねん。」

盛野様：「ちーとばかり待て。もういっぺん勝負を繰り返すとは？ どういうことや。」

図師様：「盛野様が勝つまで、この勝負を続けるちうことや。」

盛野様：「ほなら、ウチに有利な勝負ではおまへんか。」

図師様：「いえ、それでもおまへんよ。ウチの呼びかけで、続々とようけの村々から協力者がやってきていまんねんわ。」

時間をかけすぎると、ワシ等は大军になるんよ。」

盛野様：「時間を賭ける、ちゆうことか…。むむ。」

凶師様：「はい。そういうことや。勝負乗ってくれまっしやるか？」

盛野様：「（…この者の意図もわかる。

今の一揆勢では、まともに勝負しても、我が軍に勝てへん。

勝てへん勝負なら、無傷で負けた方がええうちうことか。

ワイが思うには、詐術では無い。

勝ち負けだけならば、この勝負乗るべきでない。

我が軍なら、必ず一揆を打ち破る。

やけど、わしが望むのはそないなことでは無いのや。

できれば、双方無傷でこの戦いを終わらせたい。

こやつ提案のせいで、変な欲がでてきたわい。

しかも、何よりも、無辜の者を殺さんと済む。

これは、ありがたいことや。（…）」

盛野様：「よし、その勝負乗った！！」

凶師様：「お話のわかる方で助かったわ。さあ、コッチへ、

特設の勝負の舞台をご用意しておるんや。」

盛野様：「どこに連れて行くのだ！罠ではあるまいな！」

凶師様：「野原に線を引き、この大駒を動かして勝負するのや。

農民も、兵士も大興奮の勝負がでまんねん。ええと思

いまへんか？」

盛野様：「はははつ。それは楽しそうや。

（…兵士と農民の戦う気を削ぐ気か。みなは時間かせぎのため、やるうな。

もし、わしが勝って稲穂村が降伏しても、後腐れ無いやろ

うわ。

正々堂々の勝負やからな。こないなお祭りを考えるとほ。  
こやつ、すさまじき策士だな。…」

図師様は、人の背丈より大きな巨大将棋による将棋対決を盛野様に申し込んだ。

盛野様はそれを受け入れ、2人は史上稀に見る大決戦をくり広げることとなる。

図師様：「2二角成り!!」

農民一同：「2二角成りだぞ」 「おい。ここでええか」  
「そこだそこや。ひっくり返せよ」

盛野様：「3二飛車!! 三間飛車で一気に攻めるぜ!」

兵士一同：「飛車だ」。飛車を動かせ」

「よいしょ、よいしょ。これでええか」 「ええぞ」

もう既に、盛野様は3回負けていた。図師の将棋は、非情はほど強かった。

そして、また、盛野様の玉は追い詰められていた。

盛野様：「ちくしょうわ。強い。強すぎる。

(…こないなことなら、将棋なんてやめてここで捕らえ

るか?…)」

図師様：「5五金。詰みや。」

盛野様：「ま、参った。」

図師様：「ファファファッハ。井之川殿、あれを持ってきてくれへんか。」

井之川様：「わかつたぜ。なおよし、ちーとばかり手伝え。」

井之川様、なおよし：「よいしょ。よいしょ。せーの。」  
パシャン。

井之川様となおよしは、図師様の玉の上に、王冠のような形をしたの竹かごを置いた。

盛野様：「何のまねだ?」

井之川様となおよしは、またなにかを運んでくる。  
今度は、さらにおおきな竹かご。目が異様にあらい。

それを盛野様の玉の上に置いた。

盛野様：「いったいどういうつもりだ!!」

図師様：「王者に王冠を載せ、敗者をかごの中に閉じ込めたちうツケや。」

負けた奴は、こうしてくれるわ!ファファファッハハ。

「

盛野様：「くそつ。ウチを愚弄するとは。

このような辱めを受けて、負けたまんま終われん。

もういつぺん勝負しろ！！こやつめ〜！！」ぐぐ。

。ノ

凶師様：「望むトコや。何度でも戦いまひよ。」

そして、盛野様が十五回目の負けを喫した時だったろうか。

もう、日が暮れかけた、夕焼けの空に、盛野様を応援する声が響き始めた。

兵士達：「盛野様負けるな！！頑張れ〜。」

それはどこからともなく広がり、一つの歌になった。

兵士達：「おお〜おお われらが希望、盛野様、何回負けても、勝負をすてるな

お〜おお〜おお、おおお、われらの手本。盛野様、盛野様、我らが盛野様」

盛野様：「お、お前達は…。（ノ　丁）」

農民達もその応援に対抗して、応援をしはじめた。

農民一同：「われらが稲穂村の戦略家　凶師様、凶師様、凶師様だ！  
将棋をさせれば天下、金でも銀でも蹴散らすぞ！



図師様「図師様」おお、おう、おう」

図師様：「恥ずかしいから、やめておくんなはれよ。」

そうして、稲穂村の春の夕べは、暮れていった。

その頃森島様と道覚様は、歩いていた。

森島様：「やあ、問題や。今、ウチ達2人はどこに向かっとなでっしゃろ。」

道覚様：「稲穂村ではおまへんのか？」

森島様：「はずれ」。答えは野伏の本拠や！」

道覚様：「なんでやねん、いまさら、野伏を気にする必要がある。この一大事に。」

森島様：「ええの。稲穂村はもう解決したも同然やから、積藁の国が古河茅の国を滅ぼして終わり。それでお願いします。」

野伏の問題は今動くことが一番大事。」

道覚様：「……どういうことや。」

森島様：「野伏達に、積藁の国への帰参を呼びかける。  
仕官の要請やね。積藁の国の周りにはC国をはじめとし  
て、

積藁の国と敵対する国が多いから、  
積藁の国は戦力になるものを欲しとるんだよ。」

道覚様：「積藁の国としては、犯罪者を雇うことで、  
民意の反感を買うのは怖いが、戦力としては欲しい。  
古河茅の国への侵攻への協力をしたことにより、  
積藁の国に取り立てたことにしたい。  
戦争中のごちゃごちゃの中で取り立てれば、  
民意を逆なでせん。そういうことか？」

森島様：「ご名答」

「ほら、あそこの集落、あれが、野伏達の本拠や。」

テクテクテク

道覚様：「おい！待て森島様。」

そないな堂々といくつもりか？偵察ではおまへんのか？」

森島様：「もーうわ。これからすることは交渉だよ。しかも、野伏  
にとつてお得な。」

道覚様：「確かにそうやけど、…」

森島様：「道覚様！そないな意気地なしなら置いてくぞ！！」

道覚様：「はあゝ。行くしやるかいのか。ああ。」

森島様と道覚様は、野伏の本拠地に直接乗り込んだ。

森島様と道覚様は見張りの野伏に話をつけ、野伏頭領と面会を果たした。

野伏の頭領公文隆寛は、好々爺として、野伏の頭領とは思えないほどの好人物だった。

森島様：「ご面会しとっただけのとは、ありがとございまんねんわ。」

公文様：「よい、よい。この山の中や。」

夜道も危ないやろうて。ゆっくりしていけばええ。

さて、まずお主らは何者や。

何の用でここに来よった。」

森島様：「ウチ達は、積藁の国の家老伊波様からの使いで、森島と道覚と申す。」

公文殿によいお話を持ってきた。」

道覚様：「……」

公文様：「よいお話か。それは結構。」

……侍に虚無僧か。妙な組み合わせだな。もしや、その方ら忍か？」

森島様：「ご想像におまかせしまんねんよ。そないなことより、早速、交渉しまへんか。」

公文様：「そうやな。それでよい話とはなんやるかや。」

森島様：「ちょうど今、積藁の国が古河茅の国に攻め込もうとしておるんや。」

そのための、調査の過程で、野伏となつとる公文殿のお話を耳にしたんや。

積藁の国の家老、伊波様はそれを知り、

公文様を登用するように、ウチに命じたんや。

伊波様は、野伏全員を積藁の国に雇うことを約束するとおっしゃつておるんや。」

公文様：「もし、断るとどうなるのや？」

森島様：「伊波様は、断るなら切り捨てよとご命令されていましたわ。」

頭領公文隆寛の後ろに控えている野伏たちがざわめき、立ち上がった。

公文様：「話は済んでおらん。控えろ！」

「すまなかつたな。それで、続きを。」

森島様：「もし、ウチがあんはんを打ち損じても、積藁の国の軍が討伐しまんねん。」

国境ちう地の利をなくしたこの集団を捕らえるのは易しい。」

道覚様：「……」

野伏頭領：「答えは拒絶だよ。ヒゲを生やしたお侍様。」

森島様：「なんでやねんやろか。理由をお聞かせねがいたい。

これほどの好条件を断る理由を。」

野伏頭領：「わしは、探しておるのや。昔の主君を。殿や若様を。二年前、やったなあ。

仕えとつた家は、古河茅の国でも有数の豪族で、見目様の下で甘んじてはおつたが、

若様もお強く、天下を狙える家だと、毎日毎晩忝年中誇りに思うとつた。

せやけどダンさん、世の中は厳しく、田中様の奴に些細なことで因縁をつけられ、あっちう間に、滅ぼされてしもつた。殿や若様は行方しれず。」

道覚様：「……」

森島様：「それで、野伏を。わかりまへんね。

ウチならどなたはんかに仕えて、そつしながら主君を探しまんねん。

それに、はっきり言えば、野伏頭領様には、求心力があるが、組織力はない。

資金、それどころか日々の食糧にさえ困り、

部下達は盗賊をし、品位をなくした部下の中には

人さらいまやる輩がいる。はっきり言えば、あんはんはもはやこの世界の害悪や。」

道覚様：「…」

公文様：「その通りや。ほんにその通りや。この2年間。幾つの罪を部下に犯させたのか。」

わしは、二君には仕えん。…　そうやな。わしを斬つてくれ！

もう、歳や。主君も見つからぬ。

部下達よ。本日この時までついてきてくれてありがとう  
わ。

手出しはするなよ！斬れ！その刀で斬れ！」

森島様：「もとからそのつもり、この世の害悪は消え去るがええ！  
」

抜刀する森島倫正、泣き崩れたり立ち上がる野伏達。

道覚様：「ま、待ってくれ。このような老人を斬るのは止めてくれ  
！！」

傍観していた虚無僧道覚が、急に立ち上がり叫んだ。

森島様：「は。聞こえへんなあ。」

…

道覚様：「わしが、その老人が言う若様だ！やから、やから、止めてくれ！」

森島は、ニンマリとベツトリとした笑顔になった。

森島様：「やっと言ったか。調査済みだぜ！ついでに、その深編笠をええ加減はすせ！！」

ズバッ、サツ、ヒュッ

森島様は虚無僧道覚の深編笠を、切り裂いた。

公文様：「若、若様ではおまへんか。こうしてお会いできる日がくるとは…（ノ　丁）」

道覚様：「（＞―＜）済まなかった。わしが不甲斐ないばかりに。父は、館が落ちたあの晩、矢を受けて死んだんや。

野伏の話を聞いたとき、もしやと思ったのや。

やけど、会わせる顔が無かったのや。

わしは、あの戦ではなあんもできなかった。

日頃誇った槍術も、軍学も、なあんもできなかった

た。

焼け落ちる館を背に、震えて逃げることしかできな

や。

それ以来、人と目をあわせる事ができなくなり、

ずっと虚無僧として深い笠を被って暮らしたんや。

」

野伏頭領：「若様、完璧を求める悪い癖は治っていまへんな。

あの戦、相手は二枚も三枚も上手やった。

戦の前から、勝負はついたちうワケや。そう、オノレを卑下なされるな。

みんな、限られた中から、最良の選択しかできん。若様は今でも、十分立派や。」

道覚様：「…すまぬ、…すまぬ、爺。」

森島様：「コホン。さて、積もる話もあるやろつが、本題に戻らせていただこう。」

森島様：「野伏頭領様。これからどうなさいます?。」

野伏頭領：「もちろん。若様の家来に戻るんや。」

森島様：「道覚殿。お主はどうする。もう、虚無僧のままではいられんぞ。」

道覚様：「うむ。公文達を従えて、積藁の国の伊波様に仕えようわ。ほんで、還俗する。」

わしは、これから、元の名前、出間新之助と名乗る。

森島様、道覚やらなんやらとわしをよぶでないぞ。」

森島様：「よし！交渉成立だね！これから、稲穂村の救援に行くぞ！今頃、激戦やろつな」

出間新之助：「（…今回は森島に感謝せねばならんな。

虚無僧をしとったのは単に己から逃げとっただけだ、

まだ、やることがわしには沢山ありそうや。まだ、世を捨てるには早すぎる。

公文達もいるし、武功を挙げねば。

名を成さねば、死んだ父も浮かばれへんやろつわ。

森島、お前とちーとの間一緒にいくぞ、お前についていけば何ぞ起きそうだ…）」



森島様：「ルン、ルルー　○（＼　＼　）○

…（ここまでは大成功．．ひひひ。成功か。みなが順調や。  
せやけど、こういふときこそ、気をつけなければいけへん。）

（みちひろは上手く、扇動したやろうか。図師殿は将棋対決に  
上手く持ち込めとるやろうか。）

（いや、失敗の要素は少ない。だが、考える。思いがけへん落  
とし穴があるはずや。）…」

みちひろの疾走は、終盤に差し掛かっていた。

走行予定にあった４８の村の内、４０の村は既に通過していた。

走り始めて１１日目。これほどの長距離を、疾走したことは、みち  
ひろも経験したことはなかった。

体は疲れとるはずだけど、みちひろは疲れをみせず走り続けとった。  
春の夜道、輝けなかったオノレを、燃やしつくすようにみちひろは  
走った。

みちひろ：「…（あと、８の村をまわれれば終わりか。

走り始めたときは長く感じたが、今では短く感じ  
るな。）…」

みちひろ：「…（この旅で、オノレは何ぞ変わった気がする。

心を覆った霧が晴れたような。そないな感じ

だ)……」

みちひろ：「……(森島様や井之川殿、農民達は上手くやつとるのやるか?)」

きつと上手くやつとる。そう信じたい。)……」

みちひろ：「さあ、もっともっと速く、一気に走りきるか!」

みちひろは、一段と速度を上げ、南無阿弥陀仏の旗をたなびかせて走った。

ほんで、暗い森に差し掛かった。その時、雨が降り始めた。

みちひろ：「……(む。嫌な感じがする。賊か。いや、この空模様のせいか。)……」

森島様の考えた走行ルートは、追っ手の裏をかくものであり、みちひろはいつも難を避けることができていた。

運悪く、走行ルートに追っ手が潜んでいても、持ち前の直感力で、本日この時まで危機を避けてきた。

だが、この時、疲れと雨で、みちひろの判断力は鈍っていたのかもしれない。

みちひろ：「……(なんだ? 殺気を感じる。)……(嫌な森や。全速力で抜けるぞ!)……」

みちひろは全速力で駆け出した。だが、もう既に勝負はついていた。

ヒュン。ヒュン

突然、矢がみちひろの足を射抜いた。

みちひろ：「ヴウオー」

みちひろは、顔を歪め、叫び声をあげながら、まだ走った。まだ、諦めていなかった。走ることを。生きることが。

そのみちひろの目の前に、突然、藪の中から数人の弓兵が立ちはだかった。

ほんで、射抜いた。

プス。プスプス。

満身創痍。血みどろのみちひろ。

目から流れるものは、血やろうか。涙やろうか。

それでも、みちひろは歩みを進めた。一步一步、まだ生きとることを主張するかのように。走ることが生きることと証明するかのように。

朦朧としながらも歩を進めるみちひろの前に、ぼんやりと侍の姿が浮かんだ。

それは、みちひろの目には、一瞬、森島様の姿のようにも見えた。

その侍は、刀を振り上げ、そして一気に振り下ろした。

みちひろの存在証明は、もう誰も見るできない。

誰にも知られることなく、無残にも、その証明は中断されてしまった。

走った道と、10日で40の村を駆け抜けた飛脚の伝説、ただ、それのみが残った。

みちひろが、何者かに殺されてしまったその頃、  
稲穂村では大将棋による大決戦が続いていた。  
稲穂村を代表して駒を動かす「盤上の戦略家」図師昭輝と、  
一揆鎮圧隊の隊長である「不屈の闘志」盛野厳造。

この時点では、図師の60連勝で、図師の圧倒的優勢やった。  
だが、勝負の行方はわからない。

盛野の陣営では、明日の将棋対決に向けての作戦会議が開かれていた。

かもりん：「盛野様。失礼を承知で申しまっけど、ウチと交代しておくんははれ！」

盛野様：「ならん。これはわしと図師の奴の決闘や。」

かもりん：「こたびの戦で、皆、将棋の駒の動かし方、作戦、みな覚えたんや。

覚えええたしまんねん。」

盛野様：「ならん。」

かもりん：「では、せめてウチが陣中で合図を送るさかいに、その通りに…」

盛野様：「そないな卑怯なまねができるか!!」

その辺の兵士：「では、拙者と、是非交代を。拙者の方が、上手く指せまんねん。」

盛野様：「ならん!ならん!ならん!」

かもりん：「…(頑固やな。本来の目的を忘れていらっしやる。

このまんまでは図師様の思うつばや。

兵士達も大将棋に飲まれとる。どうにかせねば…)

「

かもりん：「では、こういたしまへんか。「早指し」の対決を提案するのや。

そもそも、長考ありの今の状態は、図師様にとって有利で、盛野様様には不利や。

沢山勝負すれば、一回くらいまぐれでも勝てるでっしやろ。

それに、なにより「公平」な勝負になるんや!」

盛野様：「確かに、そうやな。長考ありでは、長期戦に持ち込みたい図師の方が有利や。

それに、わしはいつでも早指しやから、その方がええかもしれへんな。

ハッハッハ。明日が楽しみや。」

かもりんの秘策を胸に勝負に臨む盛野様、勝利を勝ち取ることはできるのか。

早朝、日の出とともに、両軍勢は、9×9の升目が描かれた野原に集まった。

図師様：「本日もよろしいやろやろか。」

盛野様：「いや。今日は図師殿に提案したきことがある。」

図師様：「ほぅうわ。何でっしやるか。」

盛野様：「昨晚気がついたのやけど、この勝負は長考できる規則やっとな。」

やけど、よく考えてみると、これは「時間」を賭けておるお主の方が有利な規則ではおまへんか！

ほんでや。早指しを提案したい。そうでないと、この勝負、

公平さに欠けるではおまへんか。！」

図師様：「…（ええトコに気がついたんやね。」

まあ、長考ちうほど考えこんだことやらなんやら無いんやけどね。）」

その辺の兵士：「そうだ！！この勝負、イカサマだ！」

図師様：「…（この空気。まずいな。）…」

「わかりたんや。早指しやね。ええでっしやる。それで、制限時間は？」

盛野様：「一手につきこの砂時計が落ちるまで、持ち時間は無し。」

図師様：「砂時計一個？一手打ったら、ひっくり返す。そういうことやるか？」

盛野様：「そうさ。早く打って相手に渡せば、相手の時間はより短くなる。」

最初は、中間の量を示す線のトコに砂をあわせてある。

そうはいつでも、大駒を動かす時間が必要やから、

どうやってもそれなりにかかるがな。」

図師様：「その砂時計のオノレの持ち時間が無くなることも、負けにつながるちうことか。」

ふつ。そこまで考え込むようなことは無いと思うがな。

今回もウチの勝ちや。」

盛野様：「ふん。やってみんとわからんやろ。」

本日も勝負が切って落とされた。

やはり、図師様が優勢やった。

図師様は、正午までに40連勝を重ねた。

図師様：「2六歩。今回は棒銀でいくぞ！」

農民達：「おゝい。2六歩だぞ。」「いそげ」 「置いた!!」

砂時計が係りのものの手でひっくり返される。

盛野様：「9二香車。わはっは。囲うぞ、囲うぞ！」

兵士達：「えいほ。えいほ。」「置いた!!」

砂時計がもっかいひっくりかえる。

つつきー：「おらはもう駄目だゝ息が持たない。力が入りまへん。後を頼むゝ」パタン

図師様：「2五歩!!」

農民達：「はあ。はあ。置いたぞ!!」

盛野様：「8二銀。しもた!閉じちゃった。」

兵士達：「えいほ、えいほ。」「置いた!!」

そうべい：「す、すまない。足をつつてしもた。だ、どなたはんか交代を。」パタン

図師様：「2四歩。銀の必要なさそうや。」

農民達：「ぜえ、ぜえ。置・い・た!!」



盛野様：「7一金。まあええや。」

兵士達：「えいほ。えいほ。置いた!!」

なおよし：「お、おれももう無理。」 パタン

この戦いは、夕方になっても続いていた。

図師様は将棋では圧倒的に勝っていた。

だが、大駒を運ぶ労力で、農民達の疲労は限界を超えていた。その点、盛野勢は、決断の早さと、体力のある兵士達に助けられ、前日の勝負と比べると雰囲気的には優勢となっていた。

とはいっても、盛野自身も度重なる敗戦による精神的な疲労が蓄積していた。

盛野様：「…（くそうわ。今日勝たねば、いつ勝つ。これほど負けるとは。）…」

図師様：「…（粘り強い男や。そろそろ、退却してくれへんやろか。森島様の言う援軍はまだか？）…」

盛野様：「…（わては負けへん。ここまでやって、逃げ出す腰抜けではおまへん。）」

単なる将棋では無い。これは賭けなのや。双方の運命を賭けた。

あきらめなければ、いつか機会が来る）…」

夕暮れになり、図師様も農民達も疲労していた。正直もう、頭が回っていなかった。

兵士や盛野様も疲れていた。そのまんま、立って眠れそうなくらいだった。

そんな時、この勝負の終焉は突然やってきた。

盛野様：「4三玉。」

兵士達：「4・三・玉。」

… おいた。」

砂時計係り：コトン

その時、一匹の黒いものが、図師様のすぐそばで、蠢いていた。

図師様：「う、打ち歩詰めはだ、ダメだよな。 3・四・ふギヤー  
あああ ( ( > < ) ) 」

まさちゃんは、そのとき見た光景を一生忘れることができないでいる。

そう、一匹のゴキブリが、図師様の手のひらの中で、潰れていたのだった。

農民達：「さん・よん・ふゝ。　　おい たゝ」

へとへとになりよった農民達は、事態の理解よりも駒の移動を優先した。

かもりん：「あ、あれは。　二歩や。」

盛野様：「勝った！！　勝ったぞ！！」

兵士達：「ワー！！勝った。勝ったんだ！！　盛野様万歳！！」

盛野様：「お、お前達のお陰や。この勝負、心が折れそうになるとが何回もあった。

負け続けるのを耐えることができたのは、お前達の応援があつたからだゝ！！（ノ　Ｔ）」

兵士達：「盛野様！！盛野様！！　盛野様！！」

呆然とする図師様と倒れこむ農民達。勝負はもう決したのだ。

盛野様：「さあ、稲穂村諸君。武装を解除して、投降してもらおう。

」

図師様：「そうやね。あんはんの勝ちや。皆、槍を捨てまひよ。」

カラン。カラン

竹槍を捨てる音がした。

森からの大きな声：「槍をすてる必要は無い!!」

盛野様：「や。だれだ!」

森の中から、森島様と、出間様（元虚無僧）、元野伏の集団が現れた。

森島様：「ウチは、この村に雇われた浪人者。森島倫正と申す。後は、積藁の国の軍勢にござる。」

盛野様：「森島。ああ、名前は知ってるぞ。」

ああ、峯澤殿の部下やったな。積藁の国と通じている疑いがあつて首になったちゅう。

なんでお前がここにいる?」

森島様：「今は、浪人者や。まあ、積藁の国とは密接な関係があるんやが。」

昔の話はやめまひよ。

これは、積藁の国の軍勢や。今、積藁の国が古河茅の国に攻め込んでおるんや。

田中様からは、伝令が行っていなかったちうワケやか?」

盛野様：「初耳や。お前の嘘であろう!?」

森島様：「…（やはりな）…」

「嘘でも何でも、この森に潜む兵が、急襲すれば、盛野様の首は飛びまっけど。」

盛野様：「何がええたい！」

森島様：「投降を願おう！盛野様殿。もう、勝負はついた。小事に執着しすぎ、大局で負けたのや。」

盛野様：「…くつ。」

なおよし：「おい！！森島様。盛野様を逃がしてやってくれ！」

森島様：「何？」

農民達：「助けてあげておくんなはれ！！」「捕まえちゃだめ！！」「殺さないで！！」

森島様：「えゝ」

井之川様：「そういうことや。逃がしてやってくれんか。」

森島様：「嫌や。」

凶師様：「ウチからもお願いしまんねんよ。」

森島様：「みんな。酷い。」

農民達：「おゝに。おゝに。」「悪魔！！」「天罰にあっちまえ！！」

森島様：「人間怖い。。。。（）。。。。。」

公文様：「ええやないか、森島様。あきらめろ。」

森島様：「わかった。」

農民、兵士一同：「ワーッー！！良かった！！」歓喜の声が沸き起こる。

盛野様：「……」

盛野様：「かたじけへん。この恩、必ず。」

稲穂村一同：「元気でな」「また来いよ」

盛野様は、暗い夜道を兵士達とともに帰っていった。

森島様：「トコで、図師様。二歩つて。ええ仕事しすぎだよ。」

、へ、＃」

図師様：「あれは、ちーとばかり疲れておったのや。

あの、ゴキブリさえいなければ……。はよ、手を洗お。」

こうして、盤上の千本決戦と言われる名勝負は、盛野厳造の完全勝利に終わった。

盛野様と図師様の盤上の千本対決として世に伝わる迷勝負の決着がついた次の朝。

森島様、出間 新之助、頭領の公文、元野伏達、そうべい、なおよし、つつき、大おじじ、金一じい、井之川様、まさちゃん、図師様、恵向様、一同が会し、今後について話し合っていた。

なおよし：「経緯は確かにわかった。やけど、野伏を許す気にはならん。」

つつき：「おらの家族は、行方知らずのまんまや。返せ！！お前らは何しに攻めて来よった！！」

頭領の公文：「…。すまぬ。」

そうべい：「なんぼ謝られても、公文が関わってへんといつても、許す奴やらなんやらおらへん。

どないなことをしても、許すことやらんやらありえへん。

野伏を許してやって欲しいやらなんやらと。

森島様。わしらの気持ちも考えとっただきたい。」

森島様：「うん。心の溝は簡単に埋まることはないやろうな。」

そうべい：「わしらとしては、野伏達の顔もみたくないのや。積藁の国に編入されたのなら、

伊波様の指揮に入れて、二度とこの稲穂村に入れてく  
れるな！」

森島様：「そうだな…。そうしてもらうか。」

図師様：「さあ、そろそろ説明してもらおうか。」

ウチ達は、積藁の国の保護のもと、古河茅の国と戦うことになってしもたが、

当初の目的は、野伏退治やろ。

どうしてこないことになりよったのか。説明して欲しいね。」

森島様：「ウチは積藁の国の者や。」

浪人として古河茅の国に潜入し、攻め込む糸口をつくる役割を持つとった。

稲穂村の野伏退治を利用して、一揆を起こさせ、民心を離れさせた上で、

攻めるちう計画を立てた。稲穂村を利用したのは、否定はせん。

やけど、稲穂村のことも考え行動したつもりや。」

そうべい：「…」

図師様：「確かに、本日この時までの行動のようけに説明がつく。

ウチも知らんとその計画に組み込まれとったのか。」

つつき：「わしらは別に古河茅の国と戦いたかったわけではおまへん。」

森島様：「せやけど、野伏の問題を解決するには、国境がある今の現状が問題なのや。」

この稲穂村付近は、地理的に盗賊や野伏の巣窟になりや



すい。

それに、古河茅の国の政治が積藁の国に勝つとは言えへん。

一言でいえば、ようけの人を見捨てる政治や。

野伏はまだまだ生まれるやろうわ。

ウチは、古河茅の国は無くなりよった方がええと思つてる。」

なおよし：「それは道理や。古河茅の国が積藁の国より劣ることもわかる。

やけど、わしらはそれを望んでいなかった。」

森島様：「沢山の村から、助勢が集まり始めとる。この村は一揆運動の中心や。

このうねりからは、簡単に抜け出せへんぞ。

それに、積藁の国が負ければ、稲穂村も必ず焼かれる。」

つつき：「それはわかつとるが。」

井之川様：「まあ、騙した森島様が悪いわな。

なんぼ野伏の問題を解決しても、稲穂村が古河茅の国と戦う理由にならん。」

森島様：「まあ、そうか。騙したことはすまぬ。せやけど、言っておつたら成功しなかった。」

そうべい：「そないなこと、理由にならん。それに、道覚様の素性を知つとつたのなら、

それだけで野伏の問題は解決できたやないのか！」

森島様：「そうやろうな。でも、どうする。稲穂村と積藁の国の軍勢は一連托生や。」

大おじじ：「そうやなあ。ここは一つ、稲穂村は一揆の中心にはなるし、積藁の国の助力はするが、

古河茅の国と戦わん。ちうのはどうや。」

そうべい：「そうだな。それくらいならばええかも知れへん。」

森島様：「愚かだな。」

なおよし：「何！！もう一回言ってみろ！！」

森島様：「愚かだと言つとるんだ！！ちびつと上手くいっておるからって調子に乗って！

なあんも犠牲を出さんと、成果だけ要求する。

オノレが傷つかず、どなたはんも傷つかず、

どなたはんかを傷つけず、何ぞを為そうとする。

そないなことができる筈ないやろ！！やから愚かと言つたんだ！

そないな甘い姿勢では、みな。みな失ってしまうんだ！！」

まさちゃんは、森島様の怒った表情をみたのはこの一度だけだったと時々思い出す。

まさちゃん：「……」

そうべい：「……そこまで言つのなら、参戦するしかないか。気は進まんがな。」

大おじじ：「確かに、一揆はどうにもならんとこまできてしまっておるのや。

この事実が確かや。稲穂村も戦うしやるかいのやろうな……」

井之川様：「……（森島様。言いたいことはわかるが、農民達の士気はあまりにも低い。

無理に、戦に連れていっても役立つとは思えん。理念だけで人は動かんぞ。……）」

森島様達が、盛野様を稲穂村から送り出したその頃。

田中様は、ともし火を見つめながら、物思いにふけっとった。

田中様：「……（なんでやねんやろうわ。毎日毎晩忝年中何ぞが足りまへん気がする。……）」

田中様は、幼少時から、武芸、軍学、儒学、万事にすぐれ、神童と言われとった。

元服後も、優れた判断力、気性の好き、みなに優れたその能力を発揮し、名声を得とった。

特に、能力を重視する見目様が当主の座についてから、一気に家老まで取り立てられ、

古河茅の国に田中証信ありとされるほどやった。

だが、田中証信は、それに満足感を覚えたことはいつぺんもなかった。

た。

むしろ、ざらざらした気持ちだけが広がっていった。

田中様：「…（ウチの心はまるで灰だな。）…」

そんな気持ちになるのは毎晩のことだった。

オノレと違う者、幸せそうな者は嫌いだった。

そういう者は、利用できなくなるとすぐに世の中から消した。本人にもわからないように。

そういうものをみると、心が軋むような音がするのだ。

田中様は、公言したことは無かったが、一つの考えを持っていた。

「ほんまの計略は人に覺られてはならへん。ほんまの行動は人に気づかれてはならへん。」

これは、田中様が政治的駆け引きの中で学んだことだった。

だが、計画と行動の中心となる、田中証信の心は、ただ、虚ろだった。

## 第2章 陣中からのお便り（後書き）

次回、奇妙な森野の剣。その秘密が明らかになる。

なんのことやらさっぱりわかりまへん。

### 第3章 道場からのお便り（前書き）

森島倫正は侍である。しかも、剣術の達人であった。  
その過去が明らかになる。

コメディ風、関西弁戦記。始まります。

### 第3章 道場からのお便り

森島様とその仲間達は、それぞれの胸にわだかまりを抱えながらも、稲穂村の農民と近隣の村からの加勢をとりまとめ、

稲穂村を出発し、古河茅の国の中心といえる城である古岩城に向かった。

その軍勢は、稲穂村農民四十余人あまり、元野伏が二十人程、近隣から集まった農民も合計して、500人あまりだった。

この稲穂村一揆隊と呼ばれたこの一隊は、各地の村から志願者を集めながら、進軍していた。

まだ戦いの前の、ある穏やかな日のことである。

井之川様：「とつりやあ！！」

稲穂村一揆隊は、進軍を休め、急息をとつとつた。井之川様は、剣術の稽古をしていた。

まさちゃん：「森島様。森島様も剣術はできるんか？」

いっぺんも刀を抜いたトコをみたことないやんけ。」

森島様：「ふつ。甘く見てもろては困る。それでも無念流皆伝の腕前なのや。」

図師様：「無念流？？聞いたこともない流派や。どないな流派なのや??？」

森島様：「念流を窮めた鳴滝様ちう人物を知っておるか？」

図師様：「それは、聞いたことあるんやね。」

まさちゃん：「ウチもしつてまんねん。なんでも、幾多の戦いに身を投じ、

ようけ伝説を残した剣豪やね。」

森島様：「その鳴滝様が、幾多の反省点をもとに、晩年に編み出したのが無念流や。」

まさちゃん：「へ。」

図師様：「初耳やね。ちーとばかり無念流とやらをみせて欲しいやな。」

森島様：「図師様め、その口ぶりだと信じてへんな。」

無念流の凄さをちーとばかりだけみせてやろうわ。」

そう言つて、森島様は立ちあがった。

刀をスルリと抜いた。

森島様：「無念流の構えの真髄は、その不恰好さにある。」

そついうと、森島様は、

両腕を真っ直ぐ前方に伸ばし、腰を低く落とした。というよりも引いた。

目はつばの裏をしっかりと見つめ、つま先立ちし、真っ直ぐに伸ばした腕を、ワナワナと振るわせた。



井之川様：「なんちうへっぴり腰」

凶師様とまさちゃんは啞然としていた。その無様さに。

森島様：「これが基本姿勢。ほんで、次に基本技や。」

そう言った瞬間

森島様は、速く、目を疑うほど速く、  
体を回転させながら、刀を前に打ち込んだ。  
まさちゃんは、その打ち込みに「風」を感じたのだった。

凶師様：「凄いね。構えは油断させるためというところか。  
ほんで、すばやく打ち込む。」

森島様：「まあ、そないなトコや。  
この技にはある信念が込められとるんや。  
無様な格好は、油断させる意味もあるけれど、  
無駄な戦いを避ける意味もある。  
何よりも重要なのは、「見る」こと「見せへん」こ  
となのや。」

凶師様：「よくわからんな。どういうことやね。」

森島様：「相手の構えと行動をよく見ること。  
ウチが見とることを相手には気づかせへんようにする。  
ほんで、ウチがすばやく打ち込んだときには、勝負は決  
しとる。」

まさちゃん：「…あ。打ちこんだときに、刃が逆、峰打ちになって

るやん。」

森島様：「よく気がついたな。これであつとるんや。

無念流の基本技は、峰打ちやから。

無念流は、相手に気づかれず、

どなたはんにも気づかれんと、勝負を決するのを善しとする。

その方が、「強い」かららしい。

ただ、それは勝負というより暗殺に近い。

それを嫌った鳴滝様は、峰打ちを一番に覚える基本技とすること、

暗殺剣ではおまへんと伝え、

使い手が理念や心根を大事にするよう諭したのや。」

図師様：「意味を聞くと納得するが、うゝん。あの格好は遠慮したいな。」

まさちゃん：「ウチも無理や、」

森島様：「なんだなんや。みんな格好ばかり気にしやがって。

まあ、そうやろうな。

でも、なりふり構わずやりまへんとでけへんこともあるんだ。」

そういうと、森島様は、刀を鞘に納め、  
少しだけと微笑みながら、髭を手で引っ張った。

鳴滝正邦の道場は、当時積藁の国の中心街、大門街のはずれにあった。

鳴滝の道場からは、歴史に残る剣豪が何人も巣立ち、名声もあった。そないな鳴滝様の心には、大きな悲しみがあつた。

峯澤少年：「オッス！」

峯澤少年は、となりの古河茅の国から遠路遙遙やってきて、道場の近くに一人暮らしをしながら、道場に通っていた。

齡12の若さで、既に剣の強さでは道場内では並ぶ者はなかった。周囲は、皆、免許皆伝も近いやろう、剣で名が知られる日も近いやろうと噂をしていた。

峯澤少年：「鳴滝様。何をそないなさびしそうな顔をされとるのや？」

鳴滝様：「な。寂しそうな顔やらなんやらしておらぬ。ちーとばかり老けておるだけや！」

峯澤少年：「し、失礼したんや。稽古、おおきに！」

そういうと、峯澤様は小走りに道場を出て行った。

鳴滝様：「さびしそうわ。か。… 確かにそないな顔をしとったか

もしれんな。」

鳴滝様は、そうつぶやいた。

鳴滝様の悲しみの原因は、道場を巣立っていく生徒達が、命を落すことだった。

剣術を理解した強い者ほど、命を落す者が多かった。

命を落す者は、いつも、将来性を見込み一生懸命教えた生徒ばかりだった。

鳴滝様：「…（剣の代わりに櫓を振り回して有名になりよったあいつも、

一撃必殺の剣を覚えたあいつも皆、死んでしもた。

峯澤も、そないな風に死ぬのやろうか？…）」

鳴滝様：「…（わしが剣を教えるのは善か悪か。

わしはなんで生き残っておるのか。）…」

そんなことを考えてばかりいたせいで、鳴滝正邦の皺は深くなっていた。

鳴滝様は、優秀な峯澤少年の将来を考えるたびに、さらに心が重くなるのだった。

ある夕方、峯澤少年は剣術の稽古を終え、帰宅しようと道場を出た。道場の前に、見慣れない、みすばらしい格好をした少年が立っていた。

峯澤様：「道場に何ぞ用やるか？」

森島少年：「拙者は、森島倫正と申す。この道場に入門させていただきたく、参上仕った。」

入門希望ちいうので、峯澤様は、森島少年を鳴滝様のトコまで連れて行った。

鳴滝様：「困るわ。入門するには、そなたの親が金子を払う必要があるのや。」

申しわけへんが、帰ってお父上に相談なされよ。」

だが、森島様は帰らない。

森島少年：「ウチの父は、戦争から還らず。そのため金子やらんやらは無い。」

鳴滝様：「それならば入門はできぬ。」

森島少年：「侍なら、一本の剣で生活するのが道理やろう。」

金子を払えねばならんと鳴滝様は口にするのか！」

鳴滝様は顔を真っ赤にして叫ぶ、森島少年を見て、笑ってしまった。なんて、必死なんだろう。そのせいで、少しだけ、意地悪をしたくなってしまうた。

鳴滝様：「ここは道場や。金が無くては道場は維持できん。

それに、ここに通う生徒は、皆、金を払っておる。

やから、金の無い者には教えられん。

やけど、剣術の基本技を、一回教えただけで完璧に覚えることができたなら、

正規の稽古が終わった後、わしが剣術を教えてやってもよからう。」

森島少年：「よし、その基本技とやらを教えていただくかー！」

森島少年：「鳴滝様、ほんまにこないな格好なんやろか？？」

鳴滝様：「そうや。まず腕をピンと伸ばせ、ほんで腰を引いて、

目は、そうやな鰐の裏を見つめよ。

そうした後、手と足を、ワナワナと振るわせるのや。それが基本姿勢や。」

森島少年：「こうやろか？」

鳴滝様：「そうやそうや。…ック」

峯澤少年：「…（大の大人が何をしとるんだか…）…」

鳴滝様：「この構えには、意味がある。まず、敵を油断させる。

それとだな、え〜と、

敵をよく「見る」ことや。

次に出す一撃で勝負を決めることができるようにせよ。

ほんで、敵にオノレの手を読ませるな。

そのために、ワナワナと震えるのや。」

森島少年：「はい！」

鳴滝様：「その基本姿勢から、基本技や。回転して、素早く峰打ちを打ち込め！」

森島少年：「あ、あの〜。この姿勢では、手足に力が入り過ぎて、できませ〜ん。

（>―<）」

鳴滝様：「そうやな、やから、腕は力をぶちこむが、

手の指と肩の緊張は解け！

足の裏と親指、足首の緊張は解くが、

その他の部分に力を入れて足を震わせよ。

腰も、胴体もその姿勢では動かしにくかるうわ。

やけど、動かせるトコだけで体を回せ！！

そうすれば、必殺の峰打ちとなる。」

峯澤少年：「…（もつともらしいことを。あいつもかわいそうに。）…」

森島少年：「は、はい！やってみまんねん！」

ブルブル、ワナワナ

クルリ！！ビューン

鳴滝正邦は、その剣の風を感じた。鳴滝様も峯澤様も信じられなかった。

その太刀筋の鋭さと力強さは尋常ではなかった。凄烈な気を感じた程だった。

鳴滝様、峯澤様：「…（え〜）…」

鳴滝は、森島少年の中に新たな光をみた気がした。

普通と異なる方向に鍛えてみたらどうなるか。

死んでしまった教え子達の顔が、ふとよぎった。

何か新たな道が見つかるかもしれない。

鳴滝様：「コホン。明日から、この正規の訓練後、

この時間くらいからお前の稽古をつけてやろう。

もちろん、金はいらん。

今日教えた技を、千回は練習しておくように。」

森島少年：「はい！！〇（〃＾　＾〃）〇」

鳴滝様：「今日お前に教えた技は、…　タブン…　わいもよしらんが、



無念流 基本技 峰打ち と言っわ。覚えておけ！」

森島少年：「はい！」

峯澤様：「…（ああ、なんて口からでまかせや）…」

鳴滝様：「…（なんて冗談が通じない小僧や。これは教えがいがありそうだ）…」  
、（。、。）ノ

毎日の夕方の稽古が楽しみになった。

鳴滝様：「…（さあ、今度は何を教えてやろうか。）…」

鳴滝様は、峯澤少年を自身が受け継いだ念流の後継者として、オノレの経験をみな詰め込み育てることにした。  
そして、森島少年は、実験的に、思いつきのまんま、  
適当な方向性で育てることにし、それを適当に無念流と名づけた。

森島少年：「鳴滝様。この構えしかないんか。」

次の構えを教えておくんなはれよ。」

鳴滝様：「無念流には、構えは一つしか無い。諦めよ。」

森島少年：「…」

峯澤少年：「構えるちうことは、攻撃を待つちうことや。」

後手に回りやすい。やから構えは不要や。」

鳴滝様：「そういうことや。無様なその構えは、相手の戦意をくじき、不意を突くためのもの。そういう小手先のものは、幾つも必要なかるうわ。」

平和だった。楽しき日々だった。

鳴滝様：「今日は2人新たな技を教えてやろうわ。まず、前教えたように、相手にピッタリ身を寄せる。そうすると、敵は刀を使えなくなる。やってみよ。」

森島少年と峯澤少年は立ち上がり、ピッタリ体をくっつけた。

鳴滝様：「峯澤、そこから左翼肩を当てる感じで、森島の心臓めがてぶつかれ！！臆するなよ！！」

峯澤少年：「はい！！」

峯澤少年は鋭く、森島少年に体当たりを食らわせた。

森島少年：「あわわわわわ！！」

森島少年は吹っ飛んでいった。

鳴滝様：「峯澤、刀が無くてもこれで敵を倒せる。一撃必殺の技となるように鍛錬せよ！！」

森島少年：「では、ウチも。」

鳴滝様：「駄目や。森島に教える技はこの技では無い。」

森島少年：「は、はい！」

鳴滝様：「先ほどと同じように、身をくっつけよ。」

森島少年：「はい。こつやね。」

鳴滝様：「ほならず、親指で、峯澤様のわき腹をつつけ！」

つんつん。

峯澤少年：「…（こしゅぐつたい）…」

鳴滝様：「相手が堪らず動いたら、その動きとともに叫べ！」「びよ〜ん」と。

森島少年：「びよ〜ん！！」

鳴滝様：「それで、相手の動きを制せ！ 制したら！

「うひゃ、うひゃは」と叫びながら猛然と身を寄せよ！」

森島少年：「うひゃ、うひゃは」ゝ（。ゝ。ゝ）ノ

峯澤少年：「…（うゝ気持ち悪い）…」

鳴滝様：「…それだけや。」

峯澤少年：「…（えゝ）…」

森島少年：「で、でも、これでは敵をやっつけへんや。」

鳴滝様：「森島様よ。よく聞け、無念流の理念は、

敵と戦って「負けへんこと」にある。

倒すことでは無い。

死なないこと。負けんと、次の展開を切り開くこと、それが大事なのや。

敵を倒そうと、無駄なことを考える暇はないぞ！」

峯澤少年：「いつもおっしゃつとることと違つてる……」

鳴滝様：「峯澤に教えるのは、敵を倒す道や。

やから、敵を斬る、倒すのが大事なのや。

逆に、敵を倒すのに役立たぬものはみな無意味や。

流派が違えば、考え方も異なるぞ。」

森島少年：「ほなら、なんで逃げる技を教えてくれへんのや？」

鳴滝様：「逆に聞け、侍と、農民やあきんどとの違いはなんやと思っ？」

森島少年：「刀を帯びておるかおらへんか。やるか？」

鳴滝様：「ふふ。ちゃうわ。刀を落としても侍は侍や。峯澤様はどう思っ？」

峯澤少年：「命を賭ける気持ちがあるか。死ぬ想いがあるかどうか。でっしやるか。」

鳴滝様：「惜しいな。やけど、農民も天候を命がけで読み、

あきんども利益のために命を賭け、死ぬ想いで臨む。」

鳴滝様：「わからんか。そうやな。もし、侍同士が対決して、負けた方はどうなる。」

もし、合戦をして負けた軍勢の将はどうなる？」

峯澤少年：「ほぼ間違いなく、死にまんねん。」

鳴滝様：「そうなのや。侍の場合のみ、「負け」が死に直結しとるのや。」

農民でもあきんどでも、「負け」ても即死ぬことは少ない。

やけど、侍はちやうわ。」

森島少年：「なんでやねん、

それがなんで逃げることを教えへん理由になるんや？」

鳴滝様：「逃げるちうことは、「負けた」ちうことや。」

それは本当は「死ぬ」ことにつながつとるはずや。」

もし、ほんで生き延びてもそのような強さではすぐに死ぬやろう。」

わしは、それではもう侍では無いと思うんや。」

やから、逃げるような技は無念流には存在せんのか。」

森島少年：「負けへんためなら、相手を倒せばよいのに。」

鳴滝様：「そうやな。「負けへん」ためには、

「相手を倒す」か、「それ以外」の2通りの方法がある。相手を倒すことに特化したのが峯澤様に教えとる念流や。ほんで、「それ以外」に特化しとるのが、無念流なのや。」

逃げず、殺さず、只守り、唯一の攻撃は峰打ちだけ。  
そのうち打開策を見出すのや。」

森島少年：「そないな深い考えがありやったちうワケやか！」

鳴滝様：「…（今思いついたんやけど、そないな感じだ）…」

峯澤少年：「なるほど。」

こうして、道場での楽しい時間は過ぎていった。

森島様が入門して1年が経った。鳴滝様から教えられたことを忠実に守り、鍛錬を積んでいた。  
そんなある夕方。

鳴滝様：「峯澤、森島と手合わせしてみよ。」

そう言つて鳴滝様はにっこりと笑った。

森島少年は、いつものように腰を引いて手足を震わせる無様な構えをした。

峯澤少年は中段に、ただ自然に、ただ自然に木刀を構えた。

鳴滝様：「始め！」

峯澤少年は、するすると、自然な足取りで間合いを詰めた。

ヒュッ！

森島様は回転し峰打ちを放つ。だが、峯澤少年は容易く避けた。

峯澤少年：「…（あのようなええ加減な指導では、オラには勝てぬ。

だが、あの怪しげな太刀筋、油断できんぞ。先手を取り、制す！）…」

峯澤少年も「ワッ！」と声を掛け、フェイントをかけてから打ちかかる。

だが、森島少年は動じず、「ピヨッン！！」と叫び、真っ直ぐに木刀で峯澤少年の顔を突いた！

峯澤少年も堪らず後ろに下がる。

峯澤少年：「…（どうする。強く打ち、あいつが受けたトコを突くか。）…」

峯澤少年は猛然と踏み出した。そして、胴を思い切り木刀で薙いだ！森島様は受けない。

次の瞬間、森島様は横に倒れ込んだ！

峯澤少年：「…（まずい。手ごたえが無い！）…」

峯澤少年は気を失い倒れた。

峯澤少年は不思議で仕方なかった。なんでやねんオノレが森島に負けたのか。  
道を歩きながら考えた。

峯澤少年：「…（森島様の無念流は、鳴滝様様の思いつきや。それに、もしそれが理になつた強い流派だとしても、

毎日道場に通り人一倍稽古しとるオノレと、  
夕方だけ稽古する森島とでは差があるはずや。  
そもそも、森島様は剣の道に入つて1年しか  
経つておらんではおまへんか。）」

納得できなかった。

峯澤少年：「…（森島がどうして勝つたのか…。調べてみなければ。）」

翌日、峯澤少年の姿は、大根畑の隅にあつた。

峯澤少年：「…（森島は何をしとるのや。）」

農民のおじはん：「毎日ありがとな。終わったら、大根一本やる



でな。」

森島少年：「いえ、剣の修行ですから。」

そういうと、刀を抜き、大根の葉に向かって刺した！刺して刺して刺しまくった。

農民のおじはん：「ほんに器用やな〜これで虫食いもなくなるわい。」

森島少年：「侍やるから当然や。」

峯澤少年：「なるほど〜、こんな特訓を。」

今度は、森島は饅頭屋にいった。峯澤少年は中を覗き込んでいた。

饅頭屋はん：「毎日ありがとうね。たすかるわ〜

できた餡子、ちびつと分けてあげるから。」

森島少年：「いえ、修行ですから。」

森島少年は刀を抜くと、餡を煮ているなべに突っ込んでかき混ぜはじめた。

峯澤少年：「…（…その刀、ちゃんと洗ったか？）…」

饅頭屋はん：「おばはん、いつも思っんやけどね。」

刀やなくてヘラを使って欲しいなつて。」

森島少年：「ウチは人を斬ったことはない。心配ご無用。鍛錬のたまなのや。」

汗びつしよりになって力いっぱい、餡の入った大なべを刀でかき混ぜていた。

峯澤様：「なるほど。これで体力を。」

次に、森島少年はお寺に入っていた。

お坊はん：「信心深いう。仏様も喜ぶて。」

森島少年：「いえ、剣の修行や。」

森島少年は、近くに置いてあった薪を手にとると、その薪を刀で斬りつけた。

パツ。ズシャ！

あつという間に、木彫りの地藏菩薩像が出来上がっていた。

森島少年：「これを奉納致しますわ。」

峯澤少年：「なるほど、なるほど。神仏にも祈願。精神統一か。」  
時は、いつしか夕暮れになっていた。

しばらくして、峯澤少年は森島少年に勝つことができたのだった。

そないな楽しい日々も過ぎ去り、峯澤は元服し、故郷である古河茅の国に帰った。

森島も寺社奉行として働き、道場にもあまり顔を出さなくなっとった。

鳴滝様：「さびしいのう。まあ、あの二人に教えることやら

なんやらもう残ってはおらへんが。

まるつきし別のことを教えたあの2人。

どうなるか楽しみや。」

老境を迎えた鳴滝正邦、その最期は突然やってきた。

その日、鳴滝様は、剣術の指南のため積藁の国の伊波様の屋敷に出

向き、

道場のある自宅に帰ろうとしていた。森島は、鳴滝様に付き添っていた。

鳴滝様：「お前が寺社奉行とはのう。」

森島：「あるお寺に毎日木彫りの地藏様を奉納していたのだ。

そのお陰で、お坊様が推してくださったのや。ありがたいことや。」

鳴滝様：「こないんでも、ええのかのう。

峯澤のようにシャッキとした奴ならわかるが…」

暗い影が夕闇に潜んでいた。その影は近づいてきた。

鳴滝様：「む。何者や!！」

木陰から大男がすくつと立ち上がった。

有北敏郎：「わしは、有北敏郎と申す。昔、お前に負けてからずっと鍛錬しておった。

勝負しろ! 鳴滝。命を賭けて勝負しろ!」

森島：「ウチが戦いまひよか?」

鳴滝様：「いや、わしが殺る。さがっておれ。」

鳴滝様は太刀を抜いた。

有北敏郎：「前と同じだと思っなよ!！」

鳴滝様：「…（思つてなど無い。わしはもう老いた。  
わしが勝てる筈があるうか。やけど…）…」

有北敏郎は素早く切り込む。

有北敏郎：「この素早き打ち込みを見よ！」

鳴滝様：「打ち込みに早いもとりいも無いわ！馬鹿馬鹿しい！」

しかし、言葉と裏腹に、鳴滝様の体勢は崩れていった。

有北敏郎：「ふん！さあ！死ね！！」

森島様は、有北敏郎の刀が鳴滝様の腹を切り裂くのを見た。

有北敏郎：「ぐ、ぐわっ」

だが、有北敏郎も又、頭上から太刀を受け、倒れた。

鳴滝様：「わ、わしも遂に終わりやな。」

鳴滝様：「森島様よ、今、なんで刀を避けんかったかわかるか。

人にはオノレが傷を負わなければ、何ぞを成せへんこと  
があるんや。

避けてかわすことは容易いが、ほなら勝てへんて…ゴハ

ツア…」

森島様：「わかりましたんや。わかったから、もうしゃべりまへん  
で。」

鳴滝様：「お前には、「負けへん」剣術を教えた。

やけど、それだけでは未完成だと思ふのや。

…ハア：「負ける」ことは「死ぬ」ことや。死ぬべきや。

やけど、死ぬことは「負ける」ことやろうか。…

…わしは勝つたのや。やから、、泣くな…」

そう言つて、鳴滝様はにつこりと笑つた。森島は死を理解し、さめざめと泣いた。

鳴滝正邦はこの世を去つた。

鳴滝の葬儀が終わり、

森島は剣の稽古を辞めてしまった。

森島様の頭には、常に剣術のことがあつた。

森島様：「…（ウチの剣術に足りまへんもの）…」

死に臨んでも「勝つた」といつて笑つた師の顔が浮かんだ。

森島様：「…（どうすればいい。どうすればええちゆうのやろう。）…」

森島は、本当は知つといた。

鳴滝正邦の教える「無念流」が、

生徒が死ぬことへの悲しみから生まれた後悔の剣術だということを。

その剣術が、現実には無理があることも知っていた。

鳴滝もそのことは十分わかっていた。

無念流ではどうにもならへんことが沢山あることを。

「負けへん」でも逃げない、死なない、殺さない。それは只の夢だった。

でもその夢を見ていたかった。だから、森島に夢の剣術を授けた。

森島：「…（無念流か。師匠の思い、痛いほどわかる。）…」

死を避け、無様に生き続ける剣術。理想だけの剣術。

森島：「…（それでも、大切や。）…」

死ぬことは負けることやろうか…その言葉が森島様の頭の中を巡った。

森島様の心は晴れず、無為に時が過ぎていった。

あるとき、ある寺で、屏風をみた。

その屏風には、「懸崖撒手」という題で、絵が書かれていた

森島：「おつ。これは。なんて酷い屏風だ！」

懸崖撒手。崖から落ちそうで手だけでぶら下がっている状態から、手を自分の意志で離せ。という意味である。

絵には、苦しそうな顔をして崖にしがみつく人と、  
楽しそうな顔をして崖から落ちていく人の姿が描かれていた。

落ちていく人の笑顔と、鳴滝様の笑顔が重なって見えた。

森島：「なんて自由なのや。ははっ。死んでしまっではおまへんか。」

森島の心の中で何ぞ弾けた音がした。ほんで、曇りがすーっと無くなっていった。

森島：「そうか。「負けへん」とは究極にはこういうことなのや。

生きて、無様にも生きて、守り通すことでは無い。」

森島：「オレはやるぞ！全部自由にぶっ壊してやるぞ！自由だ！捨てるんだ！」

森島は笑った。考えこんでいたオノレが馬鹿馬鹿しく思えてきた。

そして、静かに師を思い出した。

(ノ　Ｔ)

森島は、この屏風の製作者に、賛辞の意味を込めて手紙を送った。

「お前の絵には発見が無い！」と。

返事にはこう書いてあった。

「やったら、お前が書いてみる！」

森島は、屏風に蝉の抜け殻を沢山貼り付けた。  
そして、こう書いた。

「蝉は何匹いるでしょう？」



森島：「…（抜け殻を脱いだ蝉がここに一匹いるぞ！）…」

その翌日、森島様は積藁の国伊波様の命令を受けて古河茅の国へ旅立った。

古河茅の国の田中様に仕えている峯澤の元に、積藁の国の間者として潜り込むために。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7173y/>

---

一人のサムライ@関西

2011年11月23日15時53分発行